

奈良教育大学

外部評価報告書

平成22年3月

国立大学法人奈良教育大学

目 次

1 . 委員長挨拶	1
2 . 国立大学法人奈良教育大学の平成 2 1 年度外部評価実施要項	3
3 . 国立大学法人奈良教育大学外部評価委員会 委員名簿	4
4 . 国立大学法人奈良教育大学 外部評価委員会 議事次第	5
5 . 学長裁量研究プロジェクト成果発表会 資料	7
6 . 外部評価委員会 - 1 における評価について (審議記録)	1 3 7
7 . 外部評価委員会 - 2 における評価について	1 4 7
おわりに	1 4 9

1. 委員長挨拶

このたび、奈良教育大学において研究に関する外部評価委員会が立ち上げられ、この委員会の委員長を拝命いたしました。まず、本委員会の趣旨を簡単に述べておきます。

奈良教育大学では、法人発足時の第1期中期計画において、研究の成果と水準を検証するための具体的方策として、外部評価の実施が掲げられました。その時点では、奈良教育大学のみならず、全ての国立大学において、平成20年度に行われた独立行政法人大学評価・学位授与機構（以下、機構と記述）による暫定評価は想定されていませんでした。そこで、奈良教育大学では、機構が実施した達成状況評価と現状分析について、それぞれの研究の評価方法・範囲・内容等を勘案し、改めて、第1期中期目標の趣旨と教育大学としての使命に沿って、独自に外部評価を実施することが構想されました。

以上の経過を踏まえて、本委員会での外部評価の対象は、法人発足以降に行われた学長裁量経費に基づくプロジェクト研究とされました。もとより、このプロジェクト研究は、第1期中期計画の趣旨と大学の使命を踏まえて展開されており、その特色ある研究の成果を外部評価を通して、さらに推進することが考えられました。

このように構想された外部評価委員会の趣旨を踏まえて、委員会を次のように進めました。学長裁量経費に基づくプロジェクト研究の中から学長が選定された六つのテーマ（9プロジェクト研究で構成される）について、本委員会の各委員に事前に送付された関連資料を各委員が査読・吟味しました。

平成22年3月30日（火）に奈良教育大学で開催された外部評価委員会において、上記の六つの研究について、それぞれの代表者による発表を行い、発表後に質疑応答の機会をもちました。六つの研究発表ならびに質疑応答の後に、外部評価委員会1として、各プロジェクト研究に対する評価を行いました。

外部評価委員会2では、「卓越した水準にある（SS）業績」（第1期中期目標期間の評価結果の確定のために機構宛に提出。平成22年6月末提出期限）の候補業績の評価を行いました。この提出は大学として学長の判断に委ねられていますので、本委員会では、書面審査を経て、当該の候補業績について参考意見を出すことにとどめました。

外部評価委員会委員一同は、外部評価委員会を立ち上げられた奈良教育大学の自主性・自律性ととも、SS業績提出の是非を判断する上で出来るだけ客観的な意見を求めようとされる学長の姿勢を高く評価しました。

以上、本外部評価委員会では、奈良教育大学の真摯な研究活動を知り、さらなる進展を期待して忌憚のない意見や提言を述べさせていただきました。これらを参考とされて、奈良教育大学での研究がさらに発展されれば、望外の喜びです。

平成22年3月

国立大学法人奈良教育大学 外部評価委員会

委員長 木下百合子

2. 国立大学法人奈良教育大学の平成21年度外部評価実施要項

平成21年11月25日
学 長 裁 定

(趣旨)

第1条 奈良教育大学(以下「本学」という。)における教育研究活動の状況に係る自己評価の結果について、中期計画に従い、外部の有識者による検証(以下「外部評価」という。)を行う。本学の研究活動の質の向上に資するとともに、社会への説明責任を果たすことを目的とする。

(委員会)

第2条 本学に、前条の目的を達成するため、国立大学法人奈良教育大学外部評価委員会(以下「委員会」という。)を置く。

2 委員会は、高等教育に関し広く、かつ、高い識見を有するとともに、本学の教育研究活動に深い理解を有する国、地方公共団体又は高等教育機関等の者から、学長が委嘱した委員をもって構成する。

3 前各項に規定するもののほか、委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、学長が定める。

(実施方法)

第3条 委員会は、本学の研究活動の状況に係る報告書等について外部評価を行う。

2 外部評価は、前項の報告書及び関係資料による調査のほか、必要に応じ実地調査等により行う。

(結果の公表)

第4条 外部評価結果は、学内外に公表する。

(事務)

第5条 委員会の事務は、秘書・企画課が行う。

(雑則)

第6条 この要項に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、学長が定める。

附 則

この要項は、平成21年11月25日から施行する。

3 . 国立大学法人奈良教育大学外部評価委員会 委員名簿

愛知教育大学 教育学部 教授	菅 沼 教 生
大阪教育大学 教育学部 教授	赤 松 喜 久
大阪教育大学 教育学部 教授	木 下 百合子 (委員長)
京都教育大学 教育学部 教授	藤 岡 秀 樹
兵庫教育大学 大学院学校教育研究科 教授	米 田 豊
兵庫教育大学 大学院学校教育研究科 教授	渡 邊 満

(敬称略)

4 . 国立大学法人奈良教育大学 外部評価委員会 議事次第

1 開催日時

日時：平成22年3月30日（火） 13：00～17：00

場所：奈良教育大学 大会議室（及び第1会議室）

2 議 事

- 13:00 本学学長あいさつ
出席者紹介
委員長選出・あいさつ
- 13:10 本学側より、委員会の進め方の説明
- 13:20～15:40 学長裁量研究プロジェクト成果発表会
(14:30～14:40 休憩)
- 15:50～16:00 外部評価報告書作成についての本学からの説明及び事務手続き
- 16:00～16:40 外部評価委員会 1
- 16:40～16:55 外部評価委員会 2
- 16:55～ 閉会あいさつ
- 17:00 閉 会

3 参加者

(3-1) 外部評価委員（6名 敬称略）

菅 沼 教 生	愛知教育大学	教育学部	教授
赤 松 喜 久	大阪教育大学	教育学部	教授
木 下 百合子	大阪教育大学	教育学部	教授
藤 岡 秀 樹	京都教育大学	教育学部	教授（附属特別支援 教育臨床実践センター長）
米 田 豊	兵庫教育大学	大学院学校教育研究科	教授
渡 邊 満	兵庫教育大学	大学院学校教育研究科	教授

(3-2) 本学出席者（13:10～15:40の時間帯）

- ・長友 学長
- ・中谷 理事（教育担当）
- ・佐野 副学長（研究担当）
- ・事務局各課長
- ・本学教職員
- ・宮崎 理事（総務担当）
- ・山邊 副学長（評価担当）

(3-3) 15:50～16:30の外部評価委員会 1には、本学側は、議事を記録する事務担当者1名のみ陪席。

16:30～16:45の外部評価委員会 2には、長友学長が出席。（議事を記録する事務担当者1名が、陪席）

5 . 学長裁量研究プロジェクト成果発表会 発表資料

〔平成22年3月30日(火)〕

この資料とは別に、書面での評価に資するため、発表テーマごとのプロジェクト実施報告書及び研究の背景や状況を説明する関連資料が、各委員に事前配付（平成22年3月2日）された。

目 次

研究発表1

- 『元気な子どもの育成をめざすスポーツプログラムの開発と実践
- 保健体育講座&附属小学校&国際交流・地域連携委員会によるプロジェクト - 』（平成17年度）
・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

研究発表2

- (2-1)『理数科教員養成のためのカリキュラム ビタエ試験的実践
Digital Curriculum Vitae 実践試案の模索 』（平成17年度）・・・・・・・・ 25
- (2-2)『身近なフィールドから学ぶ総合的な理科・自然環境教育プログラムの開発及び学際的研究』
(平成18年度) ・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
- (2-3)『教育学部における物質科学教育の新展開の基礎研究』 (平成20年度)・・・・・・・・ 40

研究発表3

- (3-1)『ユネスコの提起する世界遺産教育の理論的実践的な研究
- 附属中学校と奈良市教育委員会と提携して - 』（平成19年度） ・・・・・・・・ 51
- (3-2)『ESDの理念にもとづく学校づくり(4年次)
- ESDの理念を体現する教科学習と生徒会活動 - 』（平成21年度)・・・・・・・・ 66

研究発表4

- 『特別支援教育研究センターにおける地域に根ざした実証的研究プロジェクト』 (平成19年度)
・・・・・・・・・・・・・・・・ 99

研究発表5

- 『教職大学院における研究紀要の作成、及び院生の研究環境支援に関するプロジェクト』 (平成20年度)
・・・・・・・・・・・・・・・・ 115

研究発表6

- 『「卓越した教師力」の育成に向けた教職科目体系のモデル開発に関する研究
~科目連携によるカリキュラム・フレームワーク(Cuffet)の構造的深化・発展~』 (平成21年度)
・・・・・・・・・・・・・・・・ 129

研究発表 1

研究発表1

元気な子どもの育成をめざすスポーツプログラムの開発と実践

～ 保健体育講座 & 附属小学校 &
国際交流・地域連携委員会によるプロジェクト ～

平成17年度 学長裁量研究プロジェクトの
成果とその後

学長裁量研究プロジェクトが、
学内の萌芽的な研究・企画を育てた。

「組織（構成員）」：

木村 真知子（教育学部・保健体育講座）
プロジェクトの統括・招へい研究者との窓口
若吉 浩二（教育学部・保健体育講座）
スポーツプログラムの分析と改善
中谷 昭（教育学部・保健体育講座）
子どもの生活実態把握
北村 陽英（教育学部・保健体育講座）
子どもの生活実態把握
岡澤 祥訓（教育学部・保健体育講座）
開発プログラムの学部専門教育への応用
高橋 豪仁（教育学部・保健体育講座）
地域連携事業としての「スポーツ教室」の検討
中井 隆司（教育学部・保健体育講座）
スポーツプログラムの分析と改善
岡村 泰斗（教育学部・保健体育講座）
地域連携事業としての「スポーツ教室」の検討
岸田 悟（附属小学校・副校長）
「体力測定」「スポーツ教室」の検討
石川 元美（附属小学校・教員）
「体力測定」「スポーツ教室」の検討
藤田 正（附属小学校・校長）
「体力測定」「スポーツ教室」の検討
淡野 明彦（国際交流・地域連携委員会・委員）
招へい研究者の講演会「大学と地域の連携のあり方について」を開催
片岡 弘勝（国際交流・地域連携委員会・委員）
招へい研究者の講演会「大学と地域の連携のあり方について」を開催

平成20年6月休職
平成21年3月退職

平成19年3月退職
(他大学へ)

当時の担当者は不在となったが、
学長裁量研究プロジェクトは、そ
の後の授業改善(授業科目の新
設など)と地域貢献のための組
織作りの契機となった。

本プロジェクト検討課題

1. 従来からの体力向上に重点を置いたスポーツプログラムの成果を分析し、改善すべき点を明らかにする。
2. 現代の子どもに適合したスポーツプログラムを作成するために、子どもの生活実態を把握する。
3. ハイデルベルク大学 Klaus Roth 教授(行動・経験文化科学部・学部長、スポーツ科学研究所・所長)を招へいし、体力とプレイ力の向上をめざした総合的なスポーツプログラムの開発とスポーツにおける大学と地域の連携について意見を交換する。スポーツプログラムについては保健体育講座中心に研究会を開催、大学と地域の連携については、国際交流・地域連携委員会中心に講演会を開催する。

本プロジェクト検討課題

4. 上記1. 2. 3.を踏まえて、子どもの体力とプレイ力を総合的に向上させるスポーツプログラムの奈教版テキストを作成する。
5. 本学「スポーツ教室」を地域連携事業へと発展させるための諸条件を調査する。
6. 開発したプログラムを学部の専門教育に生かす可能性を調査する。

得られた成果

1. ハイデルベルク大学スポーツ化学研究所との共同研究によるもの

講演会 & デモンストレーションによる地域社会への貢献

テーマ:ハイデルベルク大学 子どものためのボールゲームABC
実りある地域連携プロジェクトに向けて

日時:平成17年12月3日(土) 午後1時30分～3時30分

場所:奈良教育大学101教室(講演会)

奈良教育大学附属体育館(デモンストレーション)

講師:クラウス ロート (ハイデルベルク大学教授)

クリスティーナ ハーン、イェンス ハーフ

(ハイデルベルク大学 研究員)

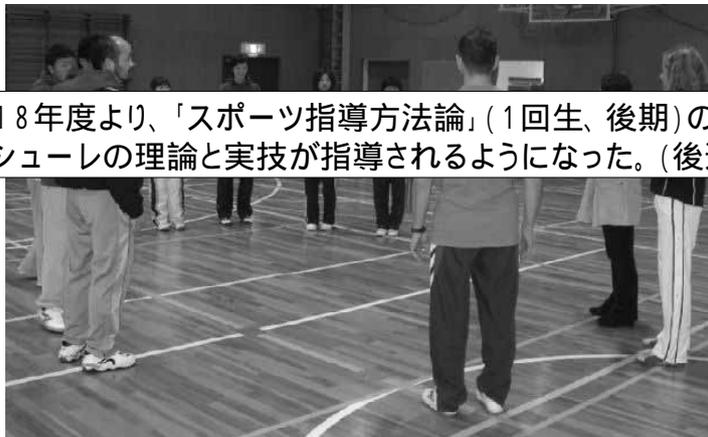
司会:木村真知子(奈良教育大学 教授)

参加者:小中学校の教員、地域スポーツ指導者 (110人)

② 学部専門教育の改善

ハイデルベルク大学スポーツ科学研究所学術研究員の Jens Haaf 氏を5ヶ月客員研究者(平成17年11月21日～平成18年4月8日)として受け入れ、学部の授業「体育原理演習」において、ハイデルベルク“Ballschule”の理論を紹介し、その理論を吟味するためにHaaf氏の指導のもと学生が実験実習を行った。この授業により、学生は種目横断的なボールゲームの先進的な指導法を学習した。

平成18年度より、「スポーツ指導方法論」(1回生、後期)の中で、バルシューレの理論と実技が指導されるようになった。(後述)



③ 附属小学校モデル「ボール教室」開催

(平成18年2月20日から3月20日まで、週3回、計13回)

ハイデルベルク“Ballschule”の指導プログラムを附属小学校3年生の児童を対象に実施することによって、日本の体育・スポーツの指導現場への本プログラムの適合性を吟味した。



平成18年度より、10回の講座を、年2回実施している(後述)



日本語版「子どもの心と体を元気にするボールゲームABC」
(仮称)テキスト作成開始

上記、①～③を踏まえ、ハイデルベルク“Ballschule”の理論に基づきながら、日本の体育・スポーツの指導現場に適合する日本版の“Ballschule”テキスト「子ども心と体を元気にするボールゲームABC」の作成を開始した。このテキスト作成は平成18年度の重点課題となる予定である。

平成19年6月『子どものボールゲーム バルシューレ』
を出版(後述)

1. 附属小学校児童の運動能力の経年的変化の調査

研究方法

1. 対象者

対象は、N大学附属小学校1から6年生の全児童であった。

2. 測定項目（体力・運動能力）

測定項目は、1) 筋力：握力、2) 筋持久力：上体おこし、3) 柔軟性：長座体前屈、4) 敏捷性：反復横跳び、5) 全身持久力：20m シャトルラン、6) スピード（走力）：50m 走、7) 筋パワー（跳力）：立ち幅跳び、8) 巧緻性・筋パワー（投力）：ソフトボール投げの計8項目を測定した。各項目における測定方法は、文部科学省「新体力テスト」に準拠し、行った。

3. スポーツ教室実施

2005年4月下旬から7月初旬までの毎週火曜日、計12回スポーツ教室を開催した。プログラム内容は、ボール運動とした。

表1 新体力テストにおける附属小学生男子と全国小学生男子の項目別平均値と標準偏差(2003年から2005年)

男子		握力 (kg)	上体起こし (times)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (point)	20mシャトルラン (times)	50m走 (seconds)	立ち幅とび (cm)	ソフトボール投げ (m)
2003年 附小	1年生	9.22±1.74	11.52±4.56	22.93±6.01	22.48±3.38	16.29±8.78		108.54±18.58	8.17±2.81
	2年生	10.94±2.44	15.53±4.51	24.49±6.30	24.58±4.02	18.72±9.24	10.56±0.91	124.87±18.16	12.15±5.00
	3年生	12.43±2.80	14.88±4.99	26.26±6.20	23.00±5.51	27.04±13.16	10.44±0.73	130.43±19.15	14.78±4.89
	4年生	14.28±2.83	19.09±3.51	27.74±6.82	30.24±4.93	41.18±14.64	9.72±0.65	141.41±15.74	19.64±6.02
	5年生	15.33±3.00	18.53±4.15	28.92±6.84	31.80±5.13	37.00±17.55	9.07±0.72	150.48±17.89	23.40±7.71
	6年生	18.37±4.55	17.27±6.17	32.08±6.71	32.78±6.00	41.13±19.05	8.93±0.78	164.42±22.33	24.94±7.54
2004年 附小	1年生	8.87±2.09	10.10±5.52	23.44±8.45	23.10±3.14	18.78±7.65		114.68±20.28	8.70±2.91
	2年生	10.73±2.18	13.03±5.93	25.71±7.73	27.27±4.93	27.03±12.25	10.34±1.05	125.69±24.19	12.01±4.69
	3年生	12.25±2.68	16.19±4.96	28.76±6.25	28.81±4.69	34.35±15.64	9.94±0.88	131.11±18.80	16.88±5.94
	4年生	14.19±3.10	14.22±4.72	30.89±7.58	33.87±7.24	39.40±18.01	9.70±0.86	137.80±18.83	20.27±6.40
	5年生	15.31±2.42	17.70±4.88	29.49±6.85	35.42±4.60	54.03±16.39	9.11±0.73	152.87±14.07	23.82±7.29
	6年生	19.14±4.19	17.70±5.69	32.51±7.33	36.78±5.32	49.98±20.39	8.35±0.62	165.80±20.52	29.14±8.78
2005年 附小	1年生	8.89±1.88	10.98±5.03	22.72±7.14	24.96±5.02	17.52±6.49		114.94±19.59	9.88±3.86
	2年生	10.07±1.43	13.42±5.76	26.5±9.7	28.44±6.07	30.22±12.31	10.61±0.84	128.78±17.31	11.79±4.34
	3年生	12.70±19.96	15.31±5.85	26.47±7.95	32.06±5.7	33.25±16.45	10.27±1.36	127.02±19.96	15.96±5.8
	4年生	14.97±3.35	17.56±4.68	27.15±8.74	35.64±6.12	46.68±18.43	9.4±0.75	137.9±22.82	20.9±7.08
	5年生	14.81±3.38	16.27±5.44	31.81±8.82	37.64±5.37	44.6±17.68	9.61±0.76	138.56±17.7	21.01±6.92
	6年生	18.50±3.60	19.79±5.01	30.52±6.88	40.79±8.30	60±18.46	8.53±0.55	160.79±17.6	28.43±8.32
全国	1年生	9.37±2.70	10.87±5.34	25.29±6.92	26.58±4.99	15.38±7.39	11.65±1.04	114.61±18.64	9.16±3.36
	2年生	11.24±2.60	13.10±5.30	27.17±7.22	30.04±5.79	23.71±11.35	10.83±1.01	127.08±17.04	12.37±4.37
	3年生	13.02±2.96	15.36±5.50	29.14±6.81	33.96±6.66	33.16±16.08	10.16±0.84	138.65±18.19	17.08±5.91
	4年生	15.22±3.41	17.04±5.66	30.92±6.86	38.12±6.89	40.61±17.84	9.75±0.82	145.49±18.62	21.42±7.10
	5年生	17.49±3.90	18.65±5.72	32.67±7.61	41.71±6.80	48.26±16.88	9.36±0.80	153.47±19.32	25.20±7.88
	6年生	20.51±4.79	21.07±5.31	34.91±7.54	44.88±6.51	58.44±20.64	8.91±0.76	166.54±20.38	30.42±9.00

表2 新体力テストにおける付属小学生女子と全国小学生女子の項目別平均値と標準偏差(2003年から2005年)

女子		握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅跳び	ソフトボール投げ
2003年 附小	1年生	9.13±1.75	11.40±4.63	25.56±6.40	21.85±3.57	16.62±5.41		103.24±36.88	6.06±2.14
	2年生	10.56±1.63	14.46±4.13	24.88±6.28	25.17±3.52	20.31±7.28	10.75±0.77	117.21±13.17	7.18±2.69
	3年生	11.06±2.17	14.55±4.30	30.24±6.07	27.00±3.69	23.68±10.23	10.51±0.84	127.32±17.48	8.88±2.50
	4年生	14.02±2.25	17.13±2.83	30.72±6.03	28.56±3.20	35.98±12.09	9.95±0.77	130.65±14.87	11.81±3.27
	5年生	15.26±3.71	16.56±3.44	33.43±6.99	28.68±3.90	28.08±11.60	9.60±0.85	137.43±22.59	13.45±3.77
	6年生	17.16±4.25	17.65±3.73	33.87±6.92	29.95±4.07	42.71±14.24	8.99±0.62	157.79±14.47	15.44±4.95
2004年 附小	1年生	8.88±1.96	8.72±5.13	26.74±9.42	23.26±1.78	13.46±4.70		102.59±16.18	5.73±1.99
	2年生	10.40±2.09	12.48±4.63	29.67±6.47	26.06±3.13	28.19±12.29	10.31±0.81	112.41±29.99	7.91±2.69
	3年生	11.11±2.21	14.71±4.66	30.80±7.53	28.16±5.60	30.66±12.14	9.87±0.89	120.59±30.60	9.76±3.33
	4年生	11.91±2.47	13.16±5.88	35.62±8.58	31.45±4.43	32.91±14.48	9.86±0.71	135.64±13.82	11.23±3.05
	5年生	15.37±3.01	15.96±4.01	33.52±6.23	31.79±4.36	45.69±12.25	9.38±0.74	146.51±16.53	15.20±4.65
	6年生	17.59±3.98	15.79±4.10	37.45±8.32	23.72±4.45	43.81±14.69	8.70±0.72	148.10±17.15	15.72±5.03
2005年 附小	1年生	8.24±1.31	10.35±4.92	25.15±7.56	22.54±3.15	13.79±4.68		100.92±15.14	5.18±1.89
	2年生	9.61±1.73	12.71±4.92	28.19±7.98	25.98±4.06	20.5±9.24	10.83±0.77	113.63±17.77	6.6±2.39
	3年生	11.78±2.21	15.37±4.7	30.36±8.18	31.01±8.28	35.85±13.19	10.18±1.03	126.67±16.73	10.44±3.28
	4年生	13.56±2.82	17.27±3.28	37.82±9.39	34.1±4.59	44.67±10.69	9.39±0.55	134.09±16.31	11.61±3.52
	5年生	14.56±2.84	16.87±5.01	36.66±6.68	35.02±4.75	38.69±13.42	9.63±0.58	140.71±17.01	14.7±3.96
	6年生	18.40±3.75	18.5±3.65	34.85±7.54	33.6±5.68	47.34±9.51	8.66±0.47	146.47±17.57	16.18±5.2
全国	1年生	8.75±2.45	10.27±4.93	27.38±7.20	26.00±4.57	13.70±5.75	11.93±1.05	105.59±17.49	5.83±1.93
	2年生	10.62±2.47	12.35±5.09	29.68±6.97	29.07±5.08	19.51±8.26	11.01±0.83	117.38±16.68	7.61±2.33
	3年生	12.06±2.86	13.96±5.06	31.50±6.92	32.37±5.70	24.80±11.08	10.50±0.82	128.12±17.92	9.55±2.95
	4年生	14.28±3.38	15.59±4.74	33.35±7.00	35.88±6.47	31.43±12.82	9.99±0.73	136.92±18.00	12.31±3.73
	5年生	16.93±4.07	16.82±5.12	36.03±7.95	39.50±6.27	38.68±15.73	9.62±0.78	145.26±19.61	14.80±4.81
	6年生	19.36±4.50	18.33±4.66	37.98±8.02	41.53±5.65	46.06±16.47	9.25±0.65	154.28±19.34	17.19±5.38

平成17年度 学長裁量研究プロジェクト実施後の展開

- 平成18年度文部科学省大学改革推進事業
大学教育の国際化推進プログラム
(海外先進教育実践支援)

「こどもスポーツ指導プログラムの国際化推進
実践的指導力のある教員養成システムの構築」

が採択される。

申請時に、平成17年学長裁量プロジェクトの実績が
評価された。

2. テキストの出版

木村 真知子(編著)、イェンス ハーフ、クラウス ロート

『子どものボールゲーム バルシューレ』

創文企画、2007年

・構成:

理論編 第1章 バルシューレのコンセプト

実践編 第2章 プレイ力を育成するゲーム 45種類

第3章 身のこなしを育成する練習 40種類

第4章 モジュール・スキルを育成する練習 40種類

3. 授業改善

実践的指導力のある教員の養成

バルシューレプログラムの活用

平成18年度より

「スポーツ指導方法論」(1回生後期)にバルシューレプログラムの
学習を取り込む

学期区分	後期
曜日	木
時限	78
科目区分	専門科目
時間割番号	5214
授業科目名	スポーツ指導方法論
教員名	田附俊一
該当する年次・課程	旧体2、旧健康2必、旧スポ2必、体1、スポ1必
単 位	2
目 的	「スポーツ指導方法論」では、スポーツ指導者として、子どもから大人までスポーツを指導する上で必要な事項を単に知識として学習するだけではなく、指導実習を通じて、スポーツ指導の実践能力習得を目的に学習する。授業は、ドイツ・ハイデルベルクのBallschule(バルシューレ:子どものボールゲーム指導法)を中心に展開し、スポーツ指導プログラムの立案、実施、反省を繰り返し、実践的な指導力の習得を目指す。
授業計画(内容と方法)	1) -3) スポーツ指導におけるプログラム作成と評価 4) スポーツ指導とIT活用 5) バルシューレの学習<理論> 6) -10) バルシューレの学習<実践> 11) -15) バルシューレの学習<指導実習>
テキスト・参考図書・教材等	木村真知子著「バルシューレABC 下イッツイ子どものボールゲーム指導法」(創文企画・2007年) (この授業履修の翌年、授業:「地域スポーツ実習」として、玉守町の総合型クラブで子どもたちを対象にバルシューレを教える人は、このテキストを用意してください。)
評価方法	レポート(70%)、出席状況(30%)で評価する(具体的な評価方法はガイダンスで説明します)。
メッセージ等	授業は受講生と教員で創られる1回限りの生き物と考えている。また、この授業は実践や指導実習が授業のコアとなることから、成績の評価方法は原則として上記の基準を用いるが、出席は評価の前提となり、どのように授業に参加したかを採点の根拠とする。授業内容は、受講者数など、種々の状況によって柔軟に対応し、内容の充実した授業となるよう受講者との話し合いの上で変更もありえる。

3. 授業改善 平成18年度に 「地域スポーツ実習」(2回生展開)を新設する

学期区分	前期	
曜日	金	
時限	910	
科目区分	専門科目	
時間割番号	5294	
授業科目名	地域スポーツ実習	
教員名	高橋 隆仁	
該当する年次・課程	体2、スポ2必	
単 位	2	
目 的	学校体育の目的の一つに、生涯にわたってスポーツを実践するための素地を増やすことがあげられる。生涯スポーツ社会の実現が求められ、また学校と地域との連携の必要性が強調される現在、将来教員となる学生にとって、地域で展開されているスポーツ活動のフィールドを知ることが重要なことである。本実習では、地域のスポーツクラブ、民間および公共団体が実施しているスポーツ教室に、指導(補助)あるいはボランティアとして参加することによって、地域で展開されるスポーツ、レクリエーション活動の運営や指導法についての認識を高め、実践的な指導能力を養うことを目的とする。	
授業計画(内容と方法)	<p>1. オリエンテーション(スポーツ指導者とは/指導者の心構え・視点)</p> <p>(1) 「地域スポーツの現場体験」のねらいについて</p> <p>(2) フィールドへの振り分け</p> <p>(3) 事前指導(実演方法、記録ノートの書き方、心構え、等)</p> <p>2. 現場での学習(おおよそ10回)</p> <p>(1) フィールド 王寺町総合型地域スポーツクラブ「やわらぎトラスト」でのバルシューレ / バルシューレ(於:奈良教育大学公開)</p> <p>(2) 学習内容 奈良市スポーツ振興事業団によるスポーツ教室(陸上競技、バドミントン、ソフトテニス、等) / 車椅子バスケットボール(於:奈良奈良市総合福祉センター) / 幼稚園児を対象とした体操教室 / 等</p> <p>(3) 学習内容 指導補助、事業の計画・準備・運営・評価等に関する実体験現場のスタッフ・職員による講話、助言、施設見学</p> <p>(4) 記録ノートへの記入 記録ノートは、一日分を記入する毎に、フィールドでの指導</p>	<p>者の署名をもらい、その翌日、大学の授業担当教員に提出する。担当教員は直ちにノートを返却するので、学生はそれを受け取り、次の学習に持参する。</p> <p>3. まとめ (1) 報告書の作成 (2) 受講生による発表会</p> <p>オリエンテーションの時に、記録ノートを配付する。</p> <p>フィールドへの参加回数、記録ノート、まとめの報告書、などによって評価する。</p> <p>オリエンテーションの日時については、別に定めるので、掲示に注意すること。 大胆、積極的に行動し、身を以て地域スポーツの実験を体験し、スポーツ指導に関する実践力を身につけてもらいたい。 フィールドでは、「やる気満々」かつ「謙虚」であって欲しい。</p>

4. バルシューレ教室の実施 (下表はH21年度実施)

	曜日	時間	学年・人数(指導者)	時期	回数
奈良教育大学公開講座 (対象:附属小学校児童)	火曜	15:30~16:30	2年生・16名/ 3年生・16名 計2クラス(指導者3名)	前期 5月~7月 後期 10月~12月	10回 9回
王寺町総合型クラブ「奈良教育大学バルシューレ」	水曜	15:30~17:00	1、2年生・20人 (指導者3人:本学学生; 授業「地域スポーツ実習」として実施)	前期 4月~7月 中期 8月~11月 後期 12月~3月	12回 12回 12回
奈良学園小学校 (課外講座)	木曜	15:00~16:30	1年生・25名 2年生・25名 計2クラス(指導者4名)	通年 6月~ (次年度)5月	33回
王寺町総合型クラブ「キッズバルシューレ」	金曜	15:00~16:00	幼稚園児(年中、年長)・20名(指導者2名)	前期 4月~7月 中期 8月~11月 後期 12月~3月	12回 12回 12回
王寺町総合型クラブ「トータルスポーツ(卓球・インディアカ・バルシューレ)」	土曜	9:30~11:30	1~6年生・40人 (指導者3人:本学学生; 授業「地域スポーツ実習」として実施)	前期 4月~7月 中期 8月~11月 後期 12月~3月	7回 7回 7回

5. NPO法人 バルシューレ ジャパン の設立 (平成21年8月認証)

バルシューレジャパンの設立趣旨

ドイツのハイデルベルク大学と研究交流のあった奈良教育大学では、平成18年度「大学教育の国際化推進プログラム(海外先進教育実践支援)」によって、バルシューレを紹介する講習会が開催され、バルシューレのテキストが刊行されました。これを機にバルシューレを取り入れようとするスポーツクラブや小学校からの問い合わせが奈良教育大学に寄せられるようになりました。バルシューレプログラムを発展的に日本で普及させるためには、ハイデルベルク大学スポーツ科学研究所および奈良教育大学との連携関係に基づきつつ、国内外の研究者とも連携協力しながら、日本に適したプログラムの開発、日本独自の指導者養成、バルシューレ教室のマネージメント等が必要となってきました。今後、バルシューレプログラムを日本で普及させていくためには、奈良教育大学との連携を保ちつつ、関連諸機関とのネットワークを積極的に構築し、サステイナブルな事業展開の可能性を目指す特定非営利活動法人の設立が急務となり、バルシューレジャパンの設立に至りました。

6. バルシューレ指導者講習会の実施

2009年11月14日(土) 10:00-12:00

八幡市スポーツ少年団指導者・保護者研修会 参加者70人
(於：旧八幡東小学校体育館)



2009年3月20日(土) 13:15-16:00

バルシューレ指導者講習会 参加者21人(小学校教員等)
(於：奈良教育大学105教室および体育館)



コメント

●奈良教育大学 高橋義仁 准教授

数年前まで奈良県に総合型地域スポーツクラブは2,3クラブしかなかったのですが、現在では育成中のものを含め約20のクラブがあります。活動開始から3年目を迎えた王寺町の「総合型地域倶楽部 やわらぎトラスト」のジュニア・キッズ会員の保護者と成人会員に対して実施したアンケート調査によつて、「やわらぎトラスト」が地域に根付いた総合型クラブとして順調に成長していることが明らかになりました。

●奈良教育大学4回生 スポーツ社会学研究室 下山栄里さん

報告会（成人の部）での発表の機会をいただき本当にありがとうございました。成人会員のアンケート結果から、参加者はスクールのプログラムをとても高く評価し、指導内容や指導方法に満足していることが分かりました。また、会員が倶楽部での活動を継続するには、倶楽部で交友関係を作ったり、運動効果を実感したりすることが重要となることが明らかになりました。今回の調査結果が、「やわらぎトラスト」発展のための資料になればと思います。

●奈良教育大学4回生 スポーツ社会学研究室 下田弘弘さん

今回キッズ・ジュニア（幼児期・児童期）コースの保護者を対象として、「スクールへの期待」と「評価」として「子どものライフスタイル」を調査しました。「子どものライフスタイル」の調査結果によると、約4割の親が子どもの安全な遊び場がないと答え、友達と外で遊ぶ日数が週に2日以下の子どもの割合が上昇しました。「やわらぎトラスト」には、「保護者のニーズに合ったスクールを開設し、子どもの運動機会を増やすこと」が求められていると思います。

奈良教育大学の皆さんの分析をもとに、改善箇所や、より倶楽部の特性を伸ばすべきものを精査し、地域住民から愛されるよりよい倶楽部づくりをオンラインアシスタツフ、専門指導者、ボランティア指導者、大学、関係機関・団体等と交えて考えていきたいと思います。

2008.4 王仲 14

卒業論文

平成20年度

松田ゆかり「幼児を対象としたBallsschule(バルシューレ)プログラムの学習効果についての研究」

平成21年度

森本修平「キッズバルシューレプログラム作成の試み」

Ballschuleプログラムが児童の運動能力に与える影響

阿部 智^{*}・木村 真知子^{**}・若吉 浩二^{**}・
石川 元美^{***}・小畑 浩^{***}・高橋 豪仁^{***}
奈良教育大学保健体育講座
(平成20年4月30日受理)

The Effects of Ballschule Program on the Motor Ability of Children

Satoshi ABE^{*}, Machiko KIMURA, Kohji WAKAYOSHI^{**}, Motomi ISHIKAWA^{***},
Osamu OBATA^{***} and Hidesato TAKAHASHI^{***}
(Department of Physical Education, Nara University of Education, Nara 630-8526, Japan)
(Received April 30, 2008)

Abstract

The purpose of this study was to investigate the change in physical fitness of elementary school children who participated in the long term sports classes using Ballschule program that has received high evaluation in Germany, and to compare the physical fitness and exercise habits of the children and that of those who had not participated in the classes. In addition, the aim of this study was to examine the effects of Ballschule program on the growth of child, and to obtain basic data to make a physical fitness program for elementary school children.

First, a total of 47 children, the 2nd and 3rd grade, practiced in sports classes of Ballschule, participated in a sports class held over the long term. There was the improvement with physical fitness and balance in the total score of the physical fitness test. Next, in the comparison of a total 34 children of the 2nd, 10 children who had participated in sports classes of Ballschule and 24 of children who had not, it is confirmed that the total coordination score of Post-test was higher than that of Pre-test in the former children. As a result, it is suggested that the improvement of the physical fitness was caused by the long-term Ballschule program. We could consider Ballschule program as an effective training program, and furthermore we need to examine the validity of Ballschule program as school education. This study elucidated the importance that we should take unspecialized physical fitness program such as Ballschule for developing children.

However, it is necessary that we demonstrate the effects of the Ballschule program by using other factors of physical fitness besides ability of coordination that have been central in test heads. And then, a program of Ballschule suitable for Japanese original social context must be suggested and practiced so that Ballschule will be familiarized, applied and practiced in various occasions.

研究発表1

元気な子どもの育成をめざすスポーツプログラムの開発と実践

～ 保健体育講座 & 附属小学校 &
国際交流・地域連携委員会によるプロジェクト ～

平成17年度 学長裁量研究プロジェクトの 成果とその後

学長裁量経費が、学内の萌芽的な
研究・企画を育てた。

研究発表 2

外部評価委員会発表会

平成 17 年度 学長裁量経費プロジェクト
「理科教員養成のための
カリキュラムピタエ試験的実践」

川崎謙一郎
数学教育講座
(平成 22 年 3 月 30日)

2010/5/13

1. 本発表の流れ:

- 先導理数プログラム-プロジェクト
アセスメント活動の全体像 (2.1)
- 平成 17 年度学長裁量経費プロジェクト
アセスメント活動の全体像 (2.2)
- 先導理数プログラム-プロジェクト
アセスメント活動の実践例 (2.3)-時間が許せば
- 実践例 -時間が許せば
- 総括他

2010/5/13

2. 理数科教育プロジェクトの中での 本学長裁量経費プロジェクト

学長裁量経費プロジェクトの実際

「理科教員養成のための
カリキュラム・ピタエ試験的実践」

2010/5/13

2.1. 先導理数プログラム-プロジェクト の2大柱

- 先端科学の基礎概念の理数
科教育への環流
- 個の認知過程のアセスメント

2010/5/13

2.2 先導理数プログラム-プロジェクト アセスメント活動の全体像

- 1 年目:平成 17 年度に試作を作成し試行した。(本学長裁量経費)
- 2 年目:先導理数プログラム全体に適用
- 3 年目:冊子化を行い、プログラム間で活動の内容の情報を共有
- 4 年目:作品ポートフォリオを作成し、情報を集約

2010/5/13

2.3 平成 17 年度学長裁量経費プロジェクト アセスメント活動の全体像

- 平成 17 年度に試作を作成し試行した。活動の詳細は、学長裁量経費プロジェクト報告書を参照してください。

2010/5/13

2.4 アセスメント活動のポイント

- 先導理数プロジェクト4年間の活動の記録を学生自身に取ってもらった点。
- 教職実践演習が叫ばれる前に、先駆けて実践している点。
- 学生の自主性を重んじている観点で、行われようとしている教職実践演習とは若干異なる点。

2010/5/13

実践の例

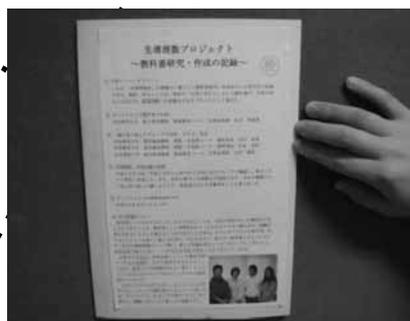
3年目：冊子化を行い、プログラム間で活動の内容の情報を共有



2010/5/13

実践の例

4年目：作品ポートフォリオを作成



2010/5/13

実践の例

4年目：作品ポートフォリオを作成



以上は、同一の作品ポートフォリオの例です。

2010/5/13

総括、反省、問題点

- 学生ファイル公開の問題-個人情報保護
- 著作権・肖像に関する権利の問題
- これまでの活動は、例えば以下のような成果物としてまとめられている:
 - 理数科教員養成のためのアセスメント実践報告～新世代を先導する理数科教員養成のためのプログラム・高大融合による理数科高校教員の養成プログラムに関わるアセスメントの実践～川崎 謙一郎、伊藤直治、河上 哲、市原 一裕 (奈良教育大学 数学教育講座)、石田正樹、藤井智康、和田稷隆、松山豊樹 (奈良教育大学 理科教育講座)、奈良教育大学教育実践総合センター紀要、奈良教育大学教育実践総合センター、第 17 号、275・282、2008.3

2010/5/13

平成18年度 学長裁量経費(教育研究改革・改善プロジェクト)

**身近なフィールドから学ぶ
総合的な理科・自然環境教育プログラムの
開発および学際的研究**

**藤井智康・石田正樹・菊地淳一・松山豊樹
鳥居春己・前田喜四雄・松井 淳・松村佳子**

背景

1. 「理科離れ」ということが深刻な問題

理科教員を志す学生や地域の小・中学校の児童や生徒に理科という楽しさを教えることが可能にするには？

2. 身近な自然を活用した研究や教材開発(フィールドワーク)

本学のキャンパス内や周辺の自然環境は？

3. 地域への情報発信

内容

1. **ビオトープおよび周辺環境をフィールドとする教材および学際的研究**
2. **デジタル図鑑の完成およびその公開**
(昆虫・土壌動物・プランクトン)
3. **キノコを活用した自然の循環学習と教材・開発および教育実践**

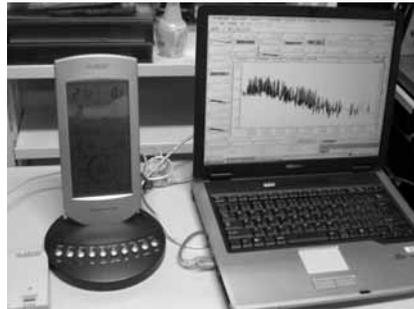
キャンパス内(ビオトープを含む)をはじめとする、キャンパス周辺を身近なフィールドとして、**気象・水環境・生物環境・土壌環境**のそれぞれの関連性について、複合的・学際的な教育・研究を目指して実施した。

1. **ビオトープおよび周辺環境をフィールドとする教材および学際的研究**

学内気象観測



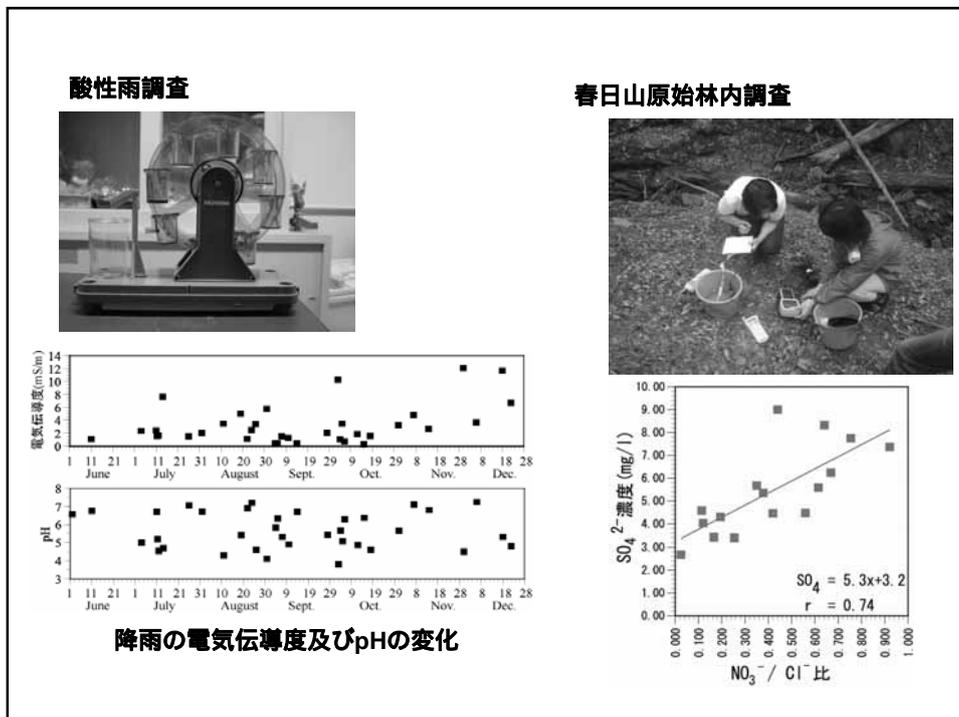
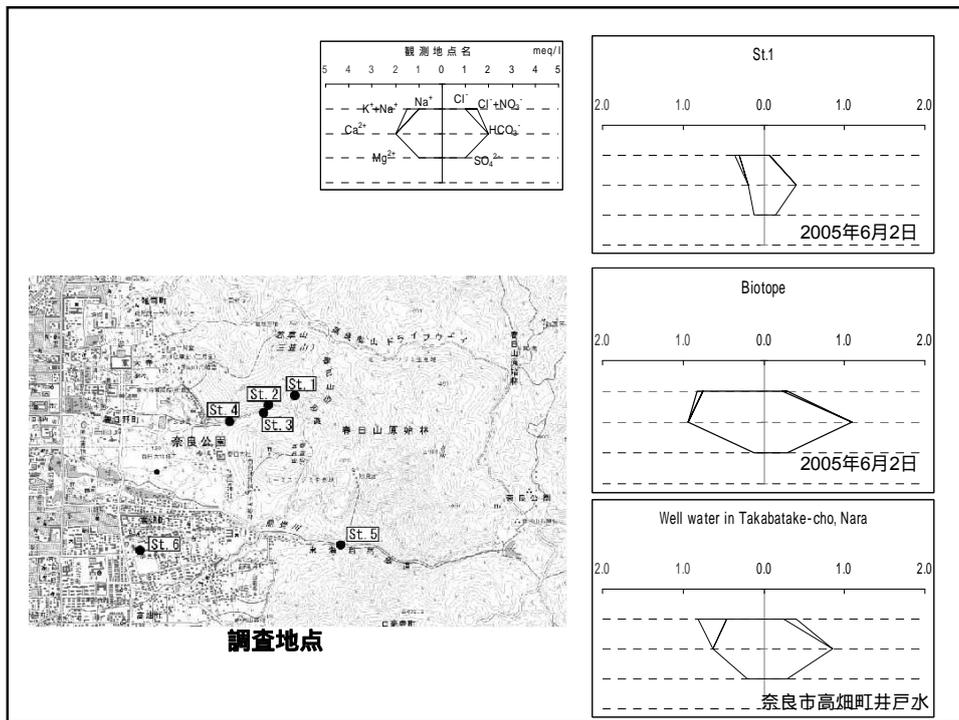
気象観測システム



気象観測モニター（研究室内）

学内ビオトープの活用





実績

- ・本学学部授業： 地学実験, 地球物理学実験, 卒業研究 (2課題)
 - 森 (2006) : 森林河川の水質特性 ~ 酸性雨に関連して
 - 棧敷 (2007) : 森林小河川における水質及び流出特性
- ・学外授業： 2005年サイエンスパートナーシッププログラム
「身近な水環境をどのように計測するか？」
- ・学術論文： 藤井智康・森 美紀 (2006) : 春日山原始林内の小河川における水質特性, 奈良教育大学紀要, 55, 2: 9-18
藤井智康・棧敷真梨子・西本由佳 (2007) : 春日山内小河川における硝酸イオンの流出特性, 奈良教育大学紀要, 56, 2: 15-20

2. デジタル図鑑の完成およびその公開 (昆虫・土壌動物・プランクトン)

図鑑（ずかん）のページ

ようこそ！ こちらは、ずかんのページです。

奈良教育大学
(ならきょういくだいがく)

の中にすんでいるむしや小さな生き物のずかんをつくりました。どんな生き物がすんでいるのでしょうか？

さがしてみてください！

♪♪♪♪このずかんは、下(した)のように全部でつづらべかたがあります。しらべの方法をきめたら、それページにあそびにいってください。載の文字をクリックしてね♪♪♪

木や木の穴(あな)をしらべろ

朽ち木(くち)をしらべろ

水や池のまわりをしらべろ

水辺(みずべ)をしらべろ

なまえからさがしてみる

なんのなまえ？からさがしてみる

地図(ちず)からさがしてみる

写真(しゃしん)でさがしてみる

色(いろ)からさがしてみる

季節(きせつ)からさがしてみる

すんでいるところからさがしてみる

昆虫の体(からだ)のつくり

昆虫類 コウチュウ目

タモの体(からだ)のつくり

トンボの体(からだ)のつくり

ハサミムシの体(からだ)のつくり

アブの体(からだ)のつくり

ハチの体(からだ)のつくり

ムギササの体(からだ)のつくり

ハシロの体(からだ)のつくり

オビウロの体(からだ)のつくり

チョウの体(からだ)のつくり

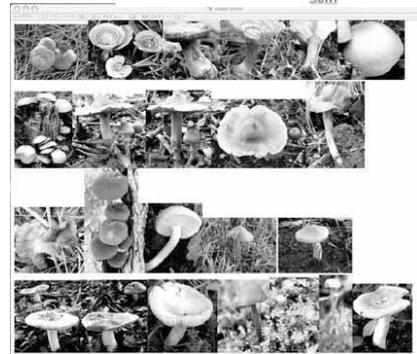
実績

- ・ アクセス件数： 双方ともに、約3000回を記録している
土の中の生き物図鑑は、2007年の開設当初からのカウント
水の中の生物図鑑は、2005年の開設であるが、2009年に
日本教育新聞に掲載後にカウンターを設置し同程度を記録
- ・ 本学学部授業にて活用： 先導理数基礎ゼミⅠ，生物学実験等，卒業研究（3課題）
- ・ 学外授業にて活用： 2005年サイエンスパートナーシッププログラム（招126）
2005年サマースクール2006イン首爾「昆虫と葉脈標本の樹脂標本作成」
2005年青少年のための科学の祭典「透明なプラスチック標本をつくろう！」
- ・ 質問箱： 一般からの質問に継続して対応している
(現在までに60件を超える)
- ・ 論文： 高見、齋藤、新井、石田（2005）奈良教育大学キャンパス
に生息する生物の図鑑（小学生を対象にしたインターネット図鑑作成）奈良
教育大学附属自然環境教育センター紀要7，57-68.

3.キノコを活用した自然の循環学習と 教材・開発および教育実践



奈良教育大学構内には全32科150種のキノコが発生することがわかった。



実績

・本学学部授業：卒業研究

・学外授業：「キノコと植物の観察会」

関西菌類談話会の観察会は、4月、5月、6月、9月、10月、11月の6回開催
原生林が残されている場所として春日山～高円山に春、初夏、晩秋の3回
二上山、大台ヶ原、芦生で開催

研究発表 2 - 3

平成20年度学長裁量経費研究プロジェクト

「教育学部における物質科学教育の新展開の基礎研究」

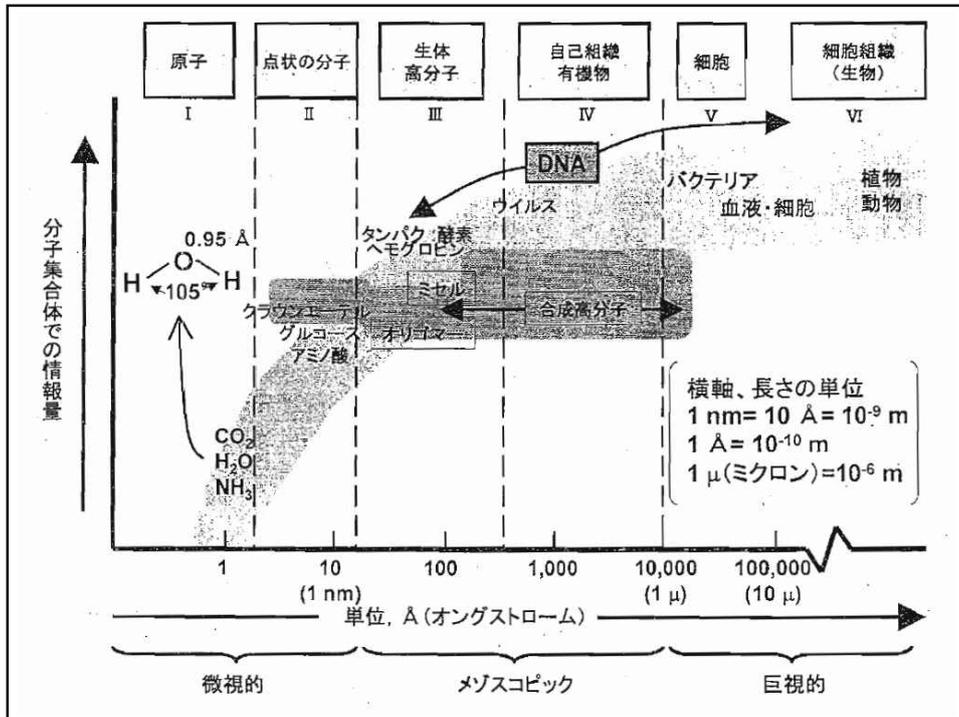
奈良教育大学第I期中期目標での

「基本的な目標」

”教育実践における応用ないし再構成が可能な専門的知識の提供。”

中期計画19 - 1

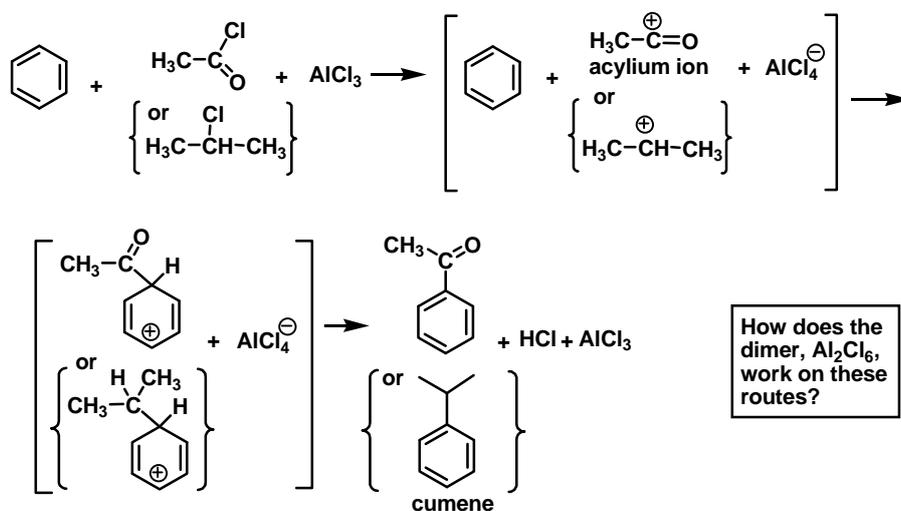
「重点的に取り組む研究領域—学問的な基礎」の教育学部での科学教育への還元。

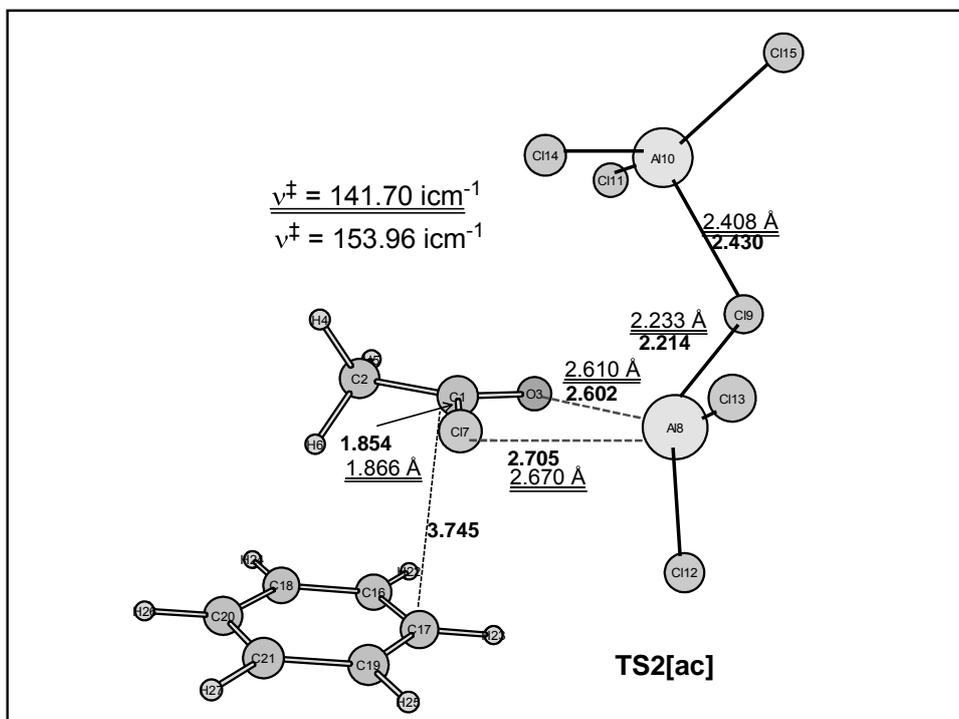
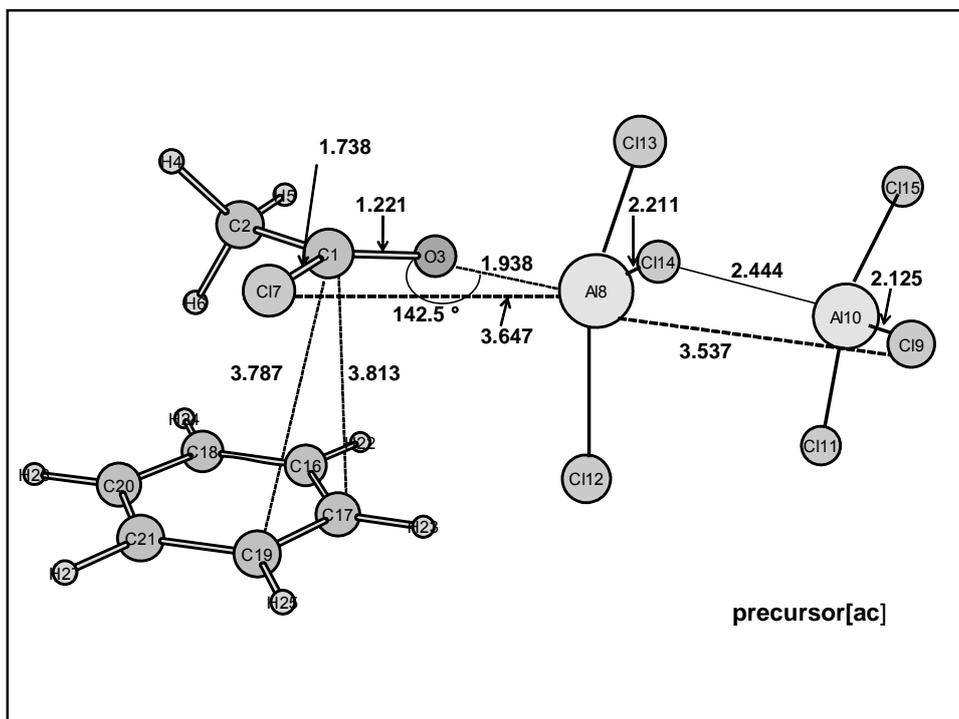


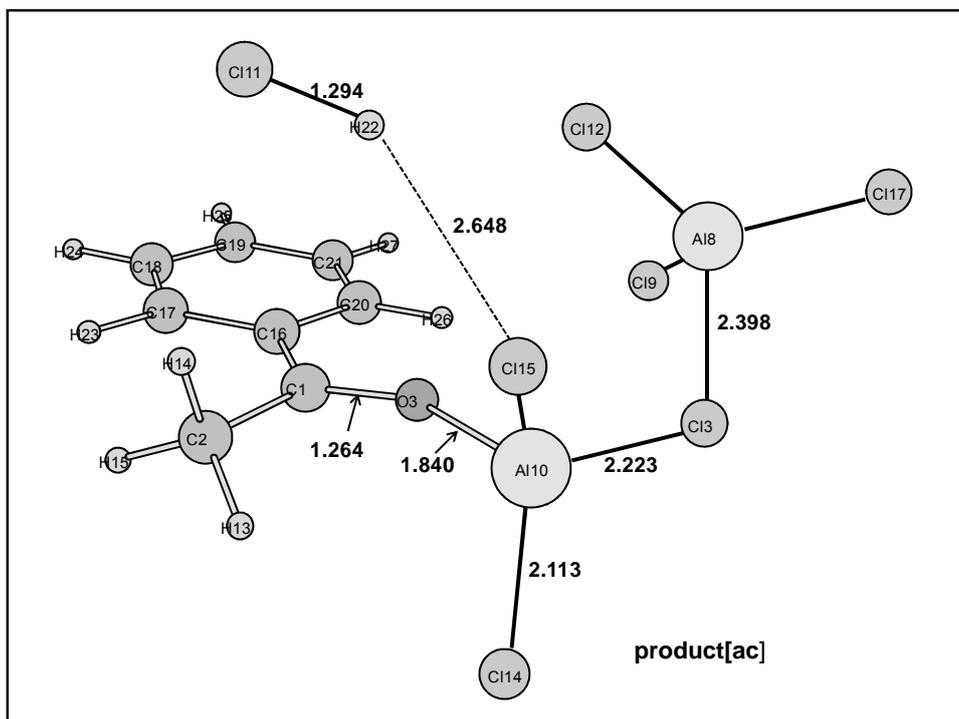
研究の背景

1. 20世紀前半に大きく発展した量子力学という学問が、物質の微視的観点の理論的基礎。
2. 20世紀後半、量子化学という分野で、計算機シミュレーションでの、分子・分子集団の微視的挙動の具体化。
3. シミュレーション用の優秀な計算ソフトウェアの開発、コンピュータの高速化。今や、シミュレーションの結果が、実測データより正確と評価される時代になった。
4. 分子・分子集団の挙動が、目に見える現象を制御している機構は確立した。
5. 科学教育における4)の相関の説明の必要性。

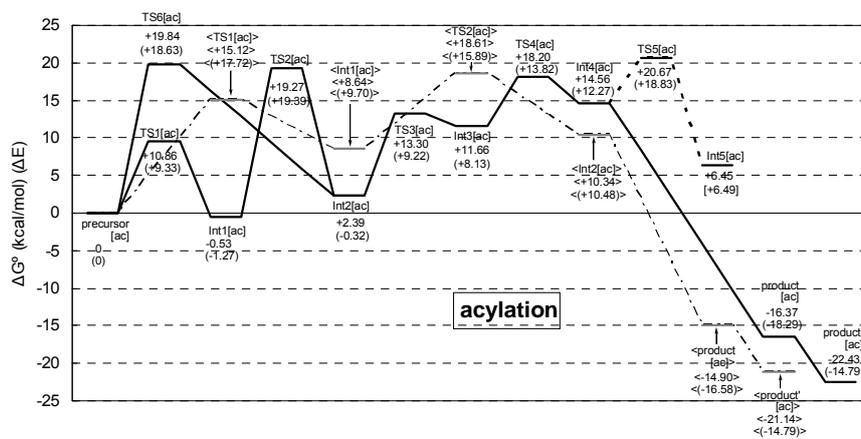
A remarkable difference in the deprotonation steps of the Friedel–Crafts acylation and alkylation reactions





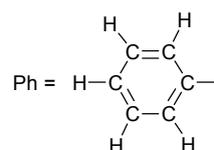
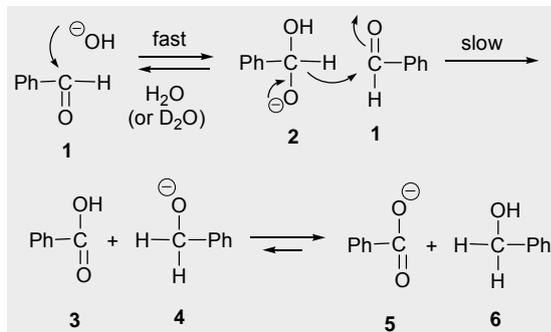


エネルギー (ΔG and ΔE) の変化

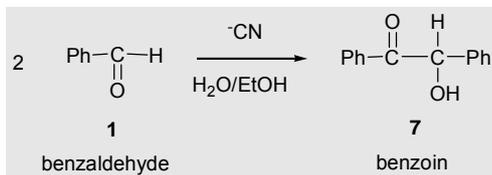


Three competitive transition states in the benzoin condensation compared to the clear rate-determining step in the Cannizzaro reaction

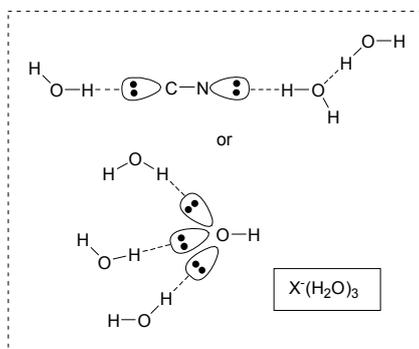
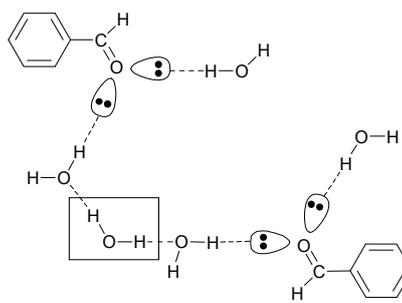
The Cannizzaro reaction

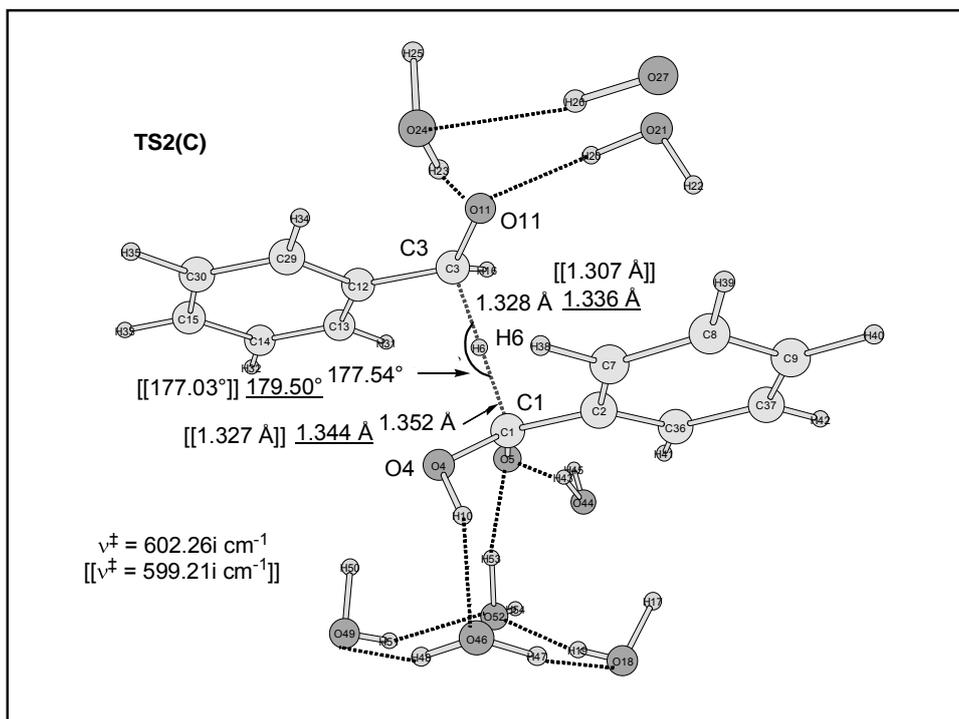


The benzoin condensation

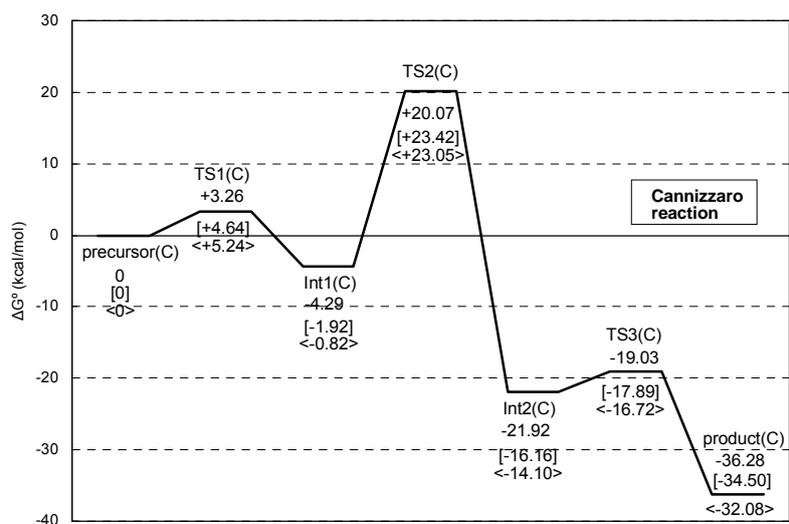


モデル化で反応初期構造過程





自由エネルギーの変化: Cannizzaro reaction



現行、化学Iの教科書での単元構成

第1篇 物質の構成

- 第1章 物質の探求
- 第2章 物質の基本構成
- 第3章 物質と化学反応式

第2編 物質の変化

- 第1章 化学反応と熱
- 第2章 酸と塩基
- 第3章 酸化還元反応

第3篇 無機物質

- 第1章 周期表と元素の性質
- 第2章 非金属元素の単体と化合物
- 第3章 金属元素の単体と化合物

第4編 有機化合物

- 第1章 有機化合物の特徴と構造
- 第2章 炭化水素
- 第3章 酸素を含む有機化合物
- 第4章 芳香族化合物

単元間の壁が厚く、説明が各論的になっている。つまり、新しい章で、既出の章での引用説明が少ない。

科学教育で扱われていない日常的現象の例

[1] 食塩の結晶は、融点801 の非常に硬い物質

である。それは、単に常温で水に溶かすだけで、

なぜ Na^+ と Cl^- に破壊される(電離する)のか？

[2] 二酸化炭素(炭酸ガス)は、なぜ温室効果ガスか？

[3] 物が燃えるに、なぜ、酸素が必要か？

奈良教育大学授業アンケート2「化学概論II」平成 21年度後期受講者学部2、3回生の無記名回答

Q1 授業で、良かった点

- ・高度な内容でしたが、様々な化学の話が聞け、自分のためになりました。
- ・色々新しい事が学べて良かった。
- ・とても熱意のある授業で良かった。
- ・ロジック(論理)
- ・楽しく授業をうけることができた！
- ・先生の熱意が伝わった。分かりやすく、化学のよさがあらためてわかった。
- ・今まで学んできた化学を、また違う視点から考えることができ、学ぶ事も多かった。
- ・ユーモアのある先生だった。
- ・系統的な面白い授業。
- ・普段の生活での疑問点について講義されていたので、面白かったです。
- ・化学のことがわかった。
- ・話の内容はとても楽しかった。

- ・高校での化学の知識が根本的に変わった。

授業アンケート「化学概論II」

Q2 授業で改善してほしい点

- ・熱い授業は大歓迎だが、もう少しペース配分を考えてもらってよいけど。
- ・黒板見にくい。
- ・字がきたない。
- ・板書

物質科学教育で、微視的世界の 挙動と巨視的現象をつなぐ。

分子の電子状態が、物質の最も
基本的な情報。

電子状態を算出する、
計算化学による原子・分子間相互作用
の具体化・教材化。

研究発表 3

ユネスコの提起する世界遺産教育の理論的実践的な研究

第1期:個人的な対応から出発

- ・ユネスコの国際会議での学び
- ・ユネスコ国内委員会との連携
- ・ESDを視野に据えた世界遺産教育

第2期:奈良市教育委員会との連携

- ・第1回世界遺産学習実践研究会
- ・第2回世界遺産学習実践研究会
- ・第2回世界遺産学習実践研究会



The Third ASP Workshop
on World Heritage Education
in Northeast Countries

Report from JAPAN

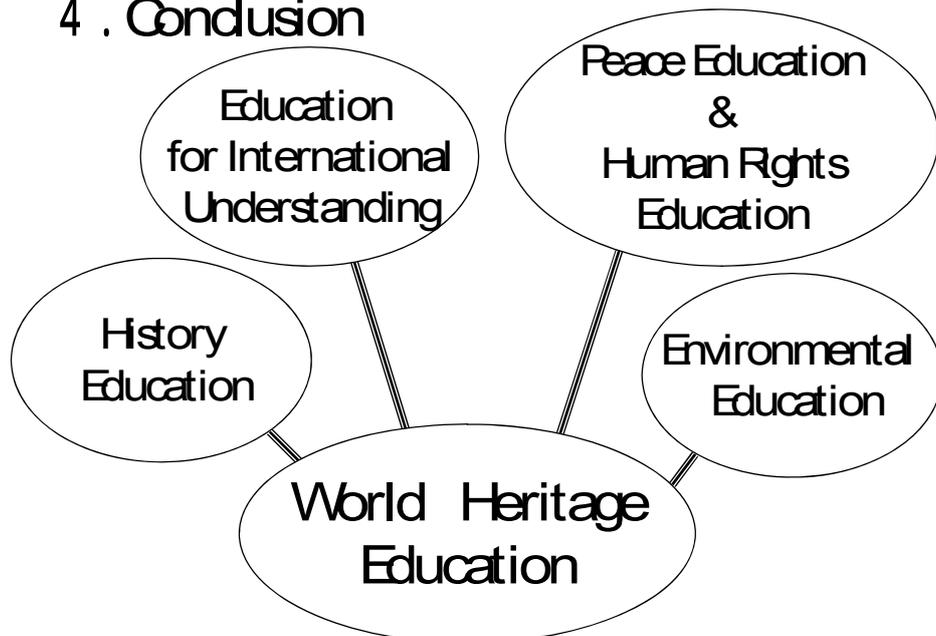
Nara University of Education

Isoo Tabuchi

Ikaruga = Horyuji International Senior High School

Takeshi Yuoka

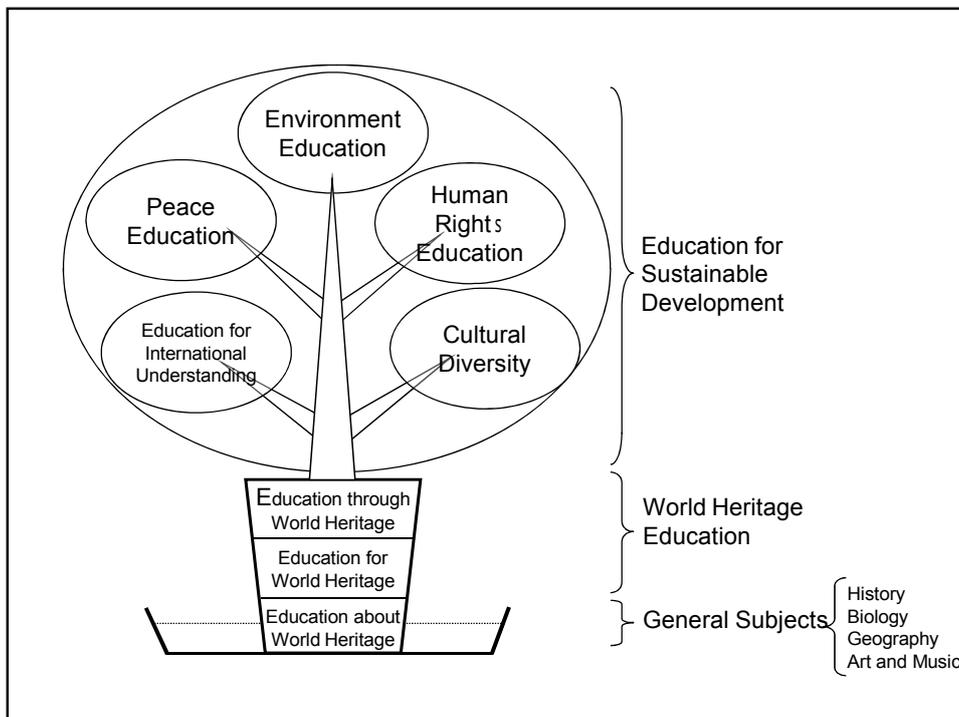
4 . Conclusion



Planning Meeting for Sub-regional Training Workshop 4-5 July
2006 Bangkok, Thailand

World Heritage Education: pedagogy, practices and challenges

Nara University of Education
Isoo Tabuchi

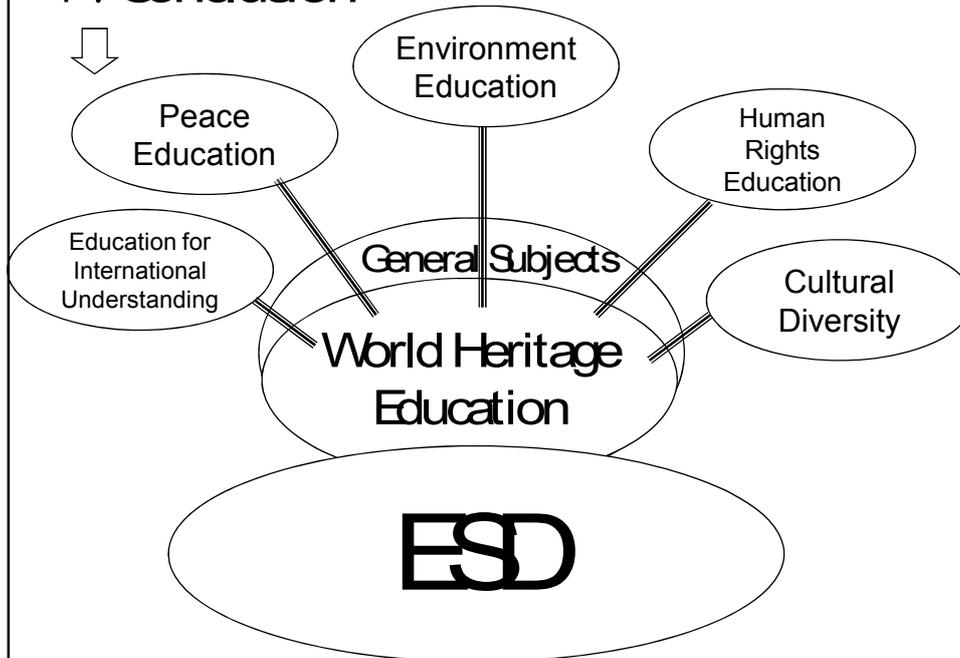


The 4th ASP Teachers Workshop on World Heritage Education for Education for Sustainable Development in East Asia

World Heritage Education: pedagogy, practices and challenges

Nara University of Education
Isoo Tabuchi

4 . Conclusion



国際理解教育とユネスコ協同学校(ASP)計画に関する第4回協議会
 エネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップ

エネスコが提起する教育をどう受けとめるか

～「世界遺産教育(WHE)」と「持続可能な開発のための教育(ESD)」を中心として～

The diagram shows 'ESD' at the bottom, with 'WHE' above it. 'WHE' is connected to '国際理解教育' (International Understanding Education), '環境教育' (Environmental Education), '平和教育' (Peace Education), '人権教育' (Human Rights Education), '国際協力' (International Cooperation), and '文化の多様性' (Cultural Diversity). 'ESD' is also connected to '持続可能な開発' (Sustainable Development).

開催日時
 2007(平成19)年3月24日(土) 12:30~18:00
 3月25日(日) 9:30~12:30

会場
 国立大学法人 奈良教育大学
 第1日 全体集会:管理棟2F 大会議室
 第2日 全体集会:講義棟1F 101教室
 分科会:講義棟1F 104・105教室

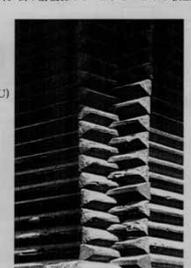
主催 日本ユネスコ協同学校(ASP)ネットワーク
 日本ユネスコ国内委員会
 奈良教育大学
 財団法人エネスコ・アジア文化センター(ACCU)
 社団法人日本ユネスコ協会連盟

共催 日本国際理解教育学会
 奈良NPOセンター

後援 奈良県教育委員会
 奈良市教育委員会
 奈良ユネスコ協会

組織 実行委員長 田頭五十生(奈良教育大学教授)
 副実行委員長 多田孝志(日大大学教授)

奈良・東大寺三月堂経庫





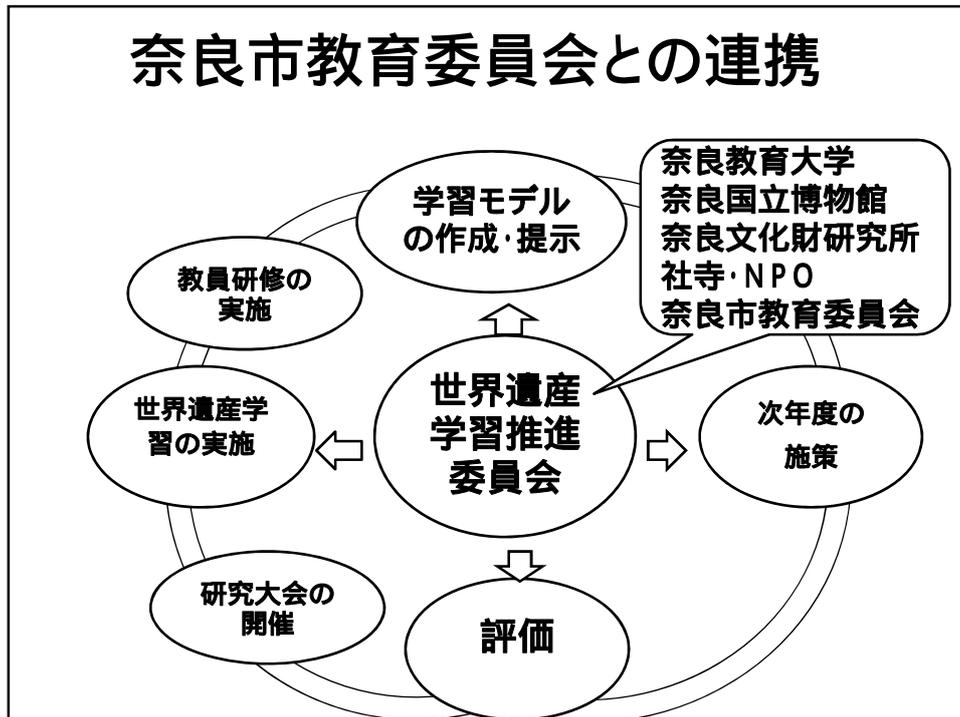

世界遺産教育実践事例集

つながり・多様性・変化

～ 日本の世界遺産を教材として取り扱うには ～

A collage of images related to World Heritage education. It features a central map of Japan with a white outline. To the left of the map is a photograph of a classroom where students are gathered around a table, looking at a laptop. Below the map is a photograph of three people in traditional Japanese attire. To the right of the map is a vertical stack of four photographs: the top one shows a dense forest, the second shows a traditional Japanese building, the third shows a large, multi-tiered pagoda, and the bottom one shows a large, modern-looking building.

奈良市教育委員会との連携



第1回奈良市世界遺産学習実践研究会・日本国際理解教育学会実践研修会
奈良教育大学ユネスコ・スクール教育実践研究会

人が好き、まちが好き、
奈良大好き世界遺産学習



- ◆ 期日 平成20年2月23日(土)
- ◆ 会場 奈良教育大学
- ◆ 主催 奈良市教育委員会・奈良教育大学
奈良国立博物館・日本国際理解教育学会
- ◆ 後援 奈良県教育委員会・(社)日本ユネスコ協会連盟
(財)ユネスコ・アジア文化センター





奈良大好き世界遺産学習



奈良大好き世界遺産学習

ティーチャーズガイド



奈良市教育委員会

テキスト、ティーチャーズガイドの作成



奈良には本当に
すばらしいものがある

調べてみよう
古都奈良の文化財

やってみよう
世界遺産学習

第2回世界遺産学習実践研究会・ユネスコスクール研修会 奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会



人が好き、まちが好き、 奈良大好き 世界遺産学習

- ◆ 期日 平成21年1月11日(日)
- ◆ 会場 奈良教育大学
- ◆ 主催 文部科学省・奈良市教育委員会・奈良教育大学
奈良国立博物館・(社)日本ユネスコ協会連盟
- ◆ 後援 奈良県教育委員会・日本国際理解教育学会
(財)ユネスコ・アジア文化センター

**第2回世界遺産学習実践研究会・ユネスコスクール研修会
奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会**

平成21年1月11日(日)に、奈良教育大学のバルテノンを会場に、第2回世界遺産学習実践研究会を開催しました。



本曾 功文部科学省国際統括官
ユネスコ国内委員会事務総長



野口 昇
日本ユネスコ協会連盟理事長



重松 敏一
奈良教育大学副学長



中安 雄佑
奈良市長職務代理者



日本ユネスコ国内委員の三木
繁光様から、奈良市立小学校に、
小学校用環境教育教材が贈呈さ
れました。



三木 繁光
ユネスコ国内委員



**世界遺産学習全国プレサミットinなら
奈良教育大学ユネスコ・スクール教育実践研究会**
日本ユネスコパートナーシップ事業

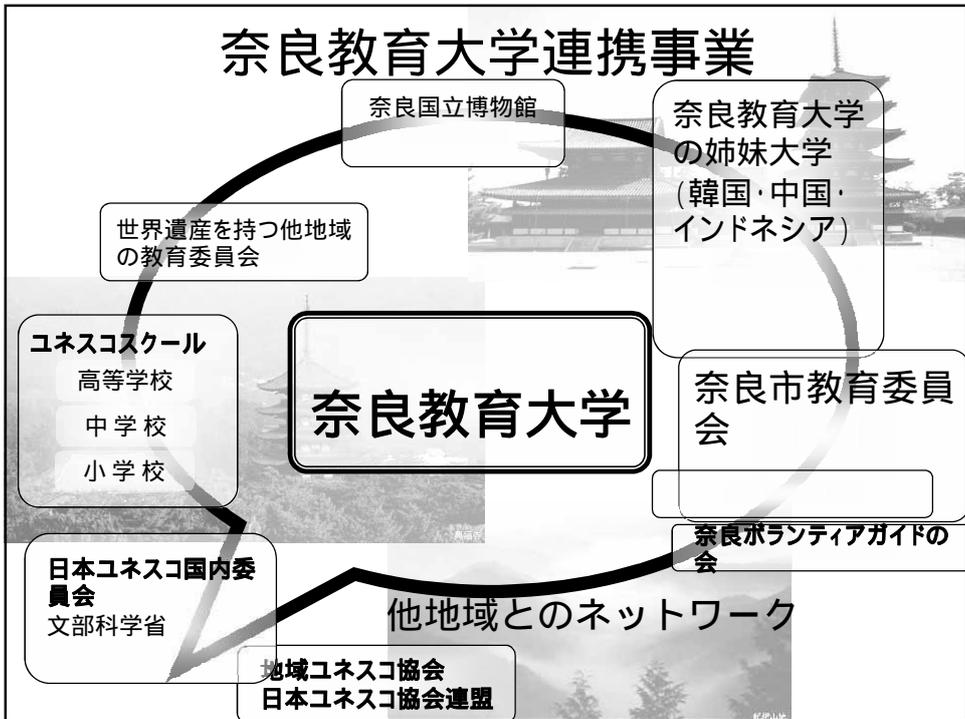


人が好き、まちが好き、
奈良大好き
世界遺産学習



- ◆ 期日 平成21年12月23日(水・祝)
- ◆ 会場 奈良教育大学
- ◆ 主催 文部科学省・奈良市教育委員会・奈良教育大学
奈良国立博物館・ASPUnivNet・世界遺産学習連絡協議会
- ◆ 後援 奈良県教育委員会・日本ユネスコ国内委員会
(社)日本ユネスコ協会連盟・日本国際理解教育学会
(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
日本環境教育学会・NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム





ユネスコの提起する世界遺産教育の理論的実践的な研究

社会科教育講座 田淵 五十生

- 2005年8月 田淵が日本ユネスコ国内委員会の代表として北京で行なわれた「東アジア5ヶ国第3回世界遺産教育ワークショップ」でプレゼンを行う
- 2006年2月 浅井国内委員会事務局長補佐を招いて、本学でASPへの理解を深める講演会開催(学長裁量経費)参加者28名奈良市 中澤指導主事
- 2006年6月 「ユネスコ・バンコク事務所」で「世界遺産とESD」のプレゼン アジア太平洋地区のリソースパーソンになる。
- 2006年11月 ソウルで「東アジア5ヶ国第4回世界遺産教育ワークショップ」開催 田淵がファシリテーター 各国で「世界遺産とESD」のテーマで国内ワークショップを開催決定(5000ドル支援)本学が引き受ける
- 2007年3月 奈良教育大学で「ユネスコが提起する教育をどう受けとめるかー世界遺産教育とESDを中心にしてー」と題してのワークショップの開催。ユネスコのパリ本部からニードルマイヤーASP担当課長の招聘。260名の参加者 『世界遺産教育実践事例集』(学長裁量経費)の刊行
- 2007年5月 奈良市教育委員会「世界遺産学習推進委員会」の設置 田淵が委員長 西山厚(奈良国立博物館学芸部長)副委員長 森本弘一教授も委員
- 2007年7月 奈良教育大学 大学最初のASPの加盟校になる
- 2008年2月 第1回「世界遺産学習実践研究会」開催(学長裁量経費 日本国際理解教育学会研究支援経費) 秋山ユネスコ専門官挨拶 212名の参加
- 2008年3月 大学と附属中学校共催の「ESD」学内研修会(学長裁量経費)の学内研修会」開催 立教大学 阿部治教授招聘
- 2008年4月 科学研究費基盤研究(B)「ユネスコの提起する世界遺産教育の教育内容と教育方法の創造」3年間で約1200万円
- 2008年8月 副読本『奈良大好き世界遺産学習』(科学研究費Bを受けの利用) 『奈良大好き世界遺産学習 ティーチーズガイド』刊行
- 2009年1月 第2回「世界遺産学習実践研究会」開催 346名の参加 木曾統括官 挨拶 田淵基調講演 本学学生の教材制作のプレゼン
- 2009年8月 『奈良大好き世界遺産学習 ティーチーズガイド』刊行
- 2009年9月 ACCUの国際フォーラム「世界遺産と観光」開催(淡野先生)
- 2009年11月 第1回ASP全国大会 東京渋谷学園 田淵 加藤副学長 片岡学長補佐 第1回ASP大学ネット会議開催 岡山大学 宮崎理事出席
- 2009年12月 第3回「世界遺産学習実践研究会」(プレサミット)開催547名
- 2010年3月 日本ユネスコ/パートナーシップ事業への申請書の提出

今後の見通し

- ・ 大学ユネスコスクールとしての役割は大きくなる ASP500校計画 閣議決定
- ・ ESDの教育内容創りが教員養成大学・学部に求められている。教員免許更新など
- ・ SDそのものの研究は大きな理系の研究大学が狙う
- ・ 世界遺産を切り口したESDの教育内容づくりは本学のアイデンティティー
附属中学校、奈良市の実践への評価は非常に高い
- ・ 奈良市の職員研修への貢献：田淵、森本、淡野、渡邊、大山

課題

学生への還元、学生参加をどう図るか

実践や活動をどう記録として残すか

個人から組織化へ：大学ネットの中心的な役割 現在は宮城教育大学が拠点
奈良市との連携 外部との折衝

研究成果の記録化

- 2006年 田淵 中澤 「奈良における世界遺産教育 シルクロードの文化を中心にしてー」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 第15号
- 2007年 田淵 中澤 「ESDを視野に入れた世界遺産教育 ユネスコの提起する教育をどう受けとめるかー」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 第16号
- 祐岡 田淵 「世界遺産教育事始めーユネスコの『教師用世界遺産教育教材』を素材としてー」2007年 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 第16号
- 2008年 谷口 祐岡 田淵「世界遺産教育の教材化の視点と実践報告」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 第17号
- 谷口 田淵「ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップの報告」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第17号
- 2009年 田淵 「世界遺産教育とその可能性 ESDを視野に入れてー」国際理解教育 第15号
- 2010年 田淵 山下 「ユネスコ協会連盟の教材キット『守ろう地球のたからもの』その作成意図と具体的事例」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第19号

学長裁量研究プロジェクト 成果発表会

2010.3.30
奈良教育大学附属中学校
教諭 植西浩一

ESDの理念にもとづく学校づくり

- ESDの理念を体現する教科学習と生徒会活動 -

ESD

- ・Education for Sustainable Development
持続可能な開発のための教育
- ・日本政府とNPOの提唱
- ・2005～2014年
国連持続可能な開発のための10年
- ・推進機関 = ユネスコ

5か年計画の研究推進

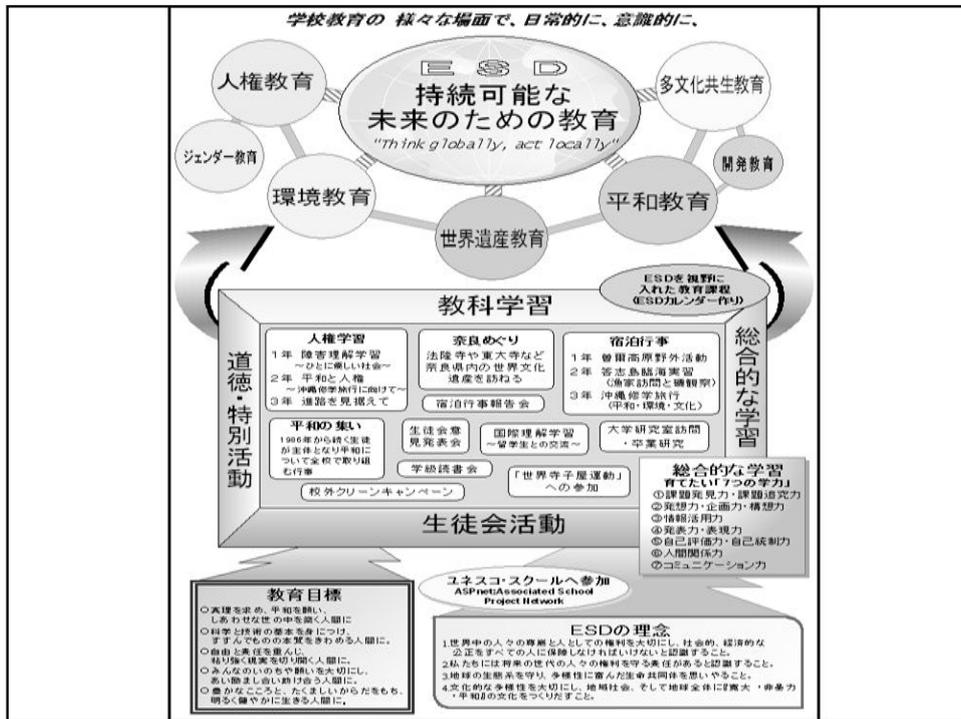
- ・1年次 基礎固めの期間
- ・2年次 ESDを視野に入れた授業研究
- ・3年次 ESDの理念を学ぶ教科学習と学校行事
- ・4年次 ESDの理念を体現する教科学習と生徒会活動
- ・5年次 ESDを実現する教育課程の創造

本校のESDの特色

- ・教育目標とESDの理念の共通性の上に立つ、学校の特色とこれまでの実践を生かした取り組み
- ・教科・教科外活動・生徒会活動の三位一体の取り組みであり、教科を中心としたホールスクールアプローチである。

教科を中心とした ホールスクールアプローチ

- ・各教科の本質に根ざした体系的な学びを核としながら、それをよりリアリティのある場である総合的な学習の時間や学校行事、生徒会活動等の場で深化、発展させていく。
- ・中学生の時期の発達を共感的理解から構造的な理解への道ととらえる。
- ・それぞれの学びのつながりを大切にする。



奈良教育大学附属中学校ESDカレンダー'07												
月/学期	1学期			2学期			3学期					
教科領域	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	D 世界遺産をめぐって			A 未来をめぐる(遺伝子(科学的文章))			F よりよい暮らしを創るために			D 漢字を通じた国際理解		
数学	AF 発展学習 統計1									空間図形 フラワーの図形		
英語	DF 世界の人々						DF 日本の文化紹介			DF 未来の文化		
社会	地理学入門 奈良の穴子 平野宮跡 ○世界の国々 ○日本の地域			日本の諸地域 「自分の住む府県について」(レポート) ○九州～近畿			○中部～北海道 ○アジア ○アメリカ ○ヨーロッパ ○オーストラリア ○アフリカ ○南極の地理的条件、歴史的背景、諸国など(1/4陸・1/4海・1/4空) 多文化共生			世界の諸地域 ○アジア ○アメリカ ○ヨーロッパ ○オーストラリア ○アフリカ ○南極の地理的条件、歴史的背景、諸国など(1/4陸・1/4海・1/4空) 多文化共生		
理科	A 「計算と時ばないで」・野原の観察・環境と共生			自由研究			F 身近な物理現象を捉える ・観察結果から分析・活用 ・日常生活との関連			A 「大勢の漢字から地球を知ろう」・増大がカギとなる地球環境問題		
総合	AD 春前学習 野外活動 修学旅行			E 障害理解学習			DF 国際理解教育			卒業式		
特別活動	C 奈良の穴子 平和教育			文化のついで			D 社会見学 民族学博物館			平和の集い		
道徳	A 生活と技術			E 我が家の春 卒業旅行			E 障害者問題を考える			平和の集いを通して 防災学習		
技術	A 生活と技術			A 我が家の春 卒業旅行								
家庭	E いろいろな家族(家族の多様性)											
保健体育	D 「アスリート」を応援しよう											
音楽				F 「ルーサー」を聴こう			D 東アジアの音			D リズム創作		
美術	A 春の自然を切り取る						F 振興:ワイズエブ(クリスティナの世界)					

(ESDカテゴリ分類記号) A: 環境教育 B: 平和教育 C: 世界遺産教育 D: 多文化共生教育 E: 人権・福祉(健康)教育(シグナ) F: 基礎(コミュニケーション)多面的総合的批判的見方

奈良教育大学附属中学校ESDカレンダー'07										1年生			2年生			3年生		
月/学期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
教科領域	1学期					夏休み	2学期					冬休み	3学期					
国語	F 依頼状	F インタビュー	C 五重の扉はなぜ倒れないか					A エアイは語る 地域の民話文			F 意見文を書く							
数学			AF 発展学習 統計Ⅰ															
英語			A 野生動物と自然観察					AF 環境問題とテキストづくり			BC カンボジア 特産地産							
社会	事前学習 臨海実習(苔志)		事後学習					BCD 沖縄県学旅行 事前学習 沖縄の歴史(世界遺産) 沖縄戦			C 奈良めぐり 事前学習							
理科	A 「海の生物のつながり」 海の生物の群集(アマモラの解剖) 動物の進化と歴史 海と山の生態系			F 自由研究		F 「見えにくい世界」 ・実験結果をもとに分析・活用 ・電通の正誤 ・物質をつくる粒(原子・分子)				A 「天気の変化のしくみを知ろう」 ・日本の天気(日本の四季) ・天気と日常生活の関係わり ・気象と自然災害								
総合	A 事前学習	C 臨海実習 苔志・伊勢	事後学習															
特別活動 生徒会	C 奈良めぐり 臨海実習		行事報告会															
道徳	F 情報とコンピュータ							C 社会見学 宇治方面			平和の集い 奈良めぐり 臨海実習							
技術	F 情報とコンピュータ							E 宇治読書会										
家庭			AD お魚レポート					E わたしたちの食生活 郷土料理										
保健体育	AE 健康と環境							D 剣道～伝統文化										
音楽								F バレーボール 2対2対抗戦										
美術	A 絵巻の思い出を切り絵にする							CD アジアの民族音楽										

(ESDカテゴリ分類記号)A:環境教育 B:平和教育 C:世界遺産教育 D:多文化共生教育 E:人権・福祉(健康教育) F:基礎(コミュニケーション)多面的総合的視野

奈良教育大学附属中学校ESDカレンダー'07										1年生			2年生			3年生		
月/学期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
教科領域	1学期					夏休み	2学期					冬休み	3学期					
国語	C 公を思う一筋きぬの伝説 昔話から変わるコミュニケーション		F 「メディア社会」を考える(説明作文)				B 挨拶～原簿の書きかえ(手紙)		F 話し合ってみよう(深いよ)			D 未来に向かって						
数学			AF 発展学習 統計Ⅰ						C 相似の図形 運動場に面積を測こう									
英語			B 初対面					A EF 南北問題 世界平和										
社会	BD 近代国家の成立と東アジア							BE 二度の世界大戦と日本			BD 現代の日本と世界							
理科	A 「生命のつながり」を調べる ・動物の生体・遺伝 ・炭水化物 ・沖縄の自然							A 「エネルギーとは？」 ・運動とエネルギー ・日常生活との関連 ・地球環境とエネルギー			A 「宇宙の中の地球」 ・地球環境と生命の存在 ・科学史(探査の歴史)	A ED 「自然と人間」 ・環境問題 ・人化への行方						
総合	事前学習	沖縄県学旅行 現地学習	事後学習															
特別活動 生徒会	C 奈良めぐり 西の伊勢方面		行事報告会															
道徳	F 情報とコンピュータ							C 社会見学 宇治			平和の集い 奈良めぐり 臨海実習							
技術	A エネルギー変換とその利用							E 宇治読書会										
家庭			AD お魚レポート					E わたしたちの食生活(食育)										
保健体育	AE 健康と環境							F バレーボール 2対2対抗戦										
音楽								E 人権学習										
美術	A 自分ことばで沖縄を切り絵にする																	

(ESDカテゴリ分類記号)A:環境教育 B:平和教育 C:世界遺産教育 D:多文化共生教育 E:人権・福祉(健康教育) F:基礎(コミュニケーション)多面的総合的視野

各教科の実践



国語科

「意見の違いを意識して考える」

- ・題材 - 「コンビニエンスストアの深夜営業規制」
環境・労働・ライフスタイル
- ・パネルディスカッションによる模擬市民会議
- ・多面的、総合的に物事を見て、考えを深める力
- ・情報を収集、吟味し、活用する力

社会科

「持続可能な社会をつくるために」

- ・題材 - 南北問題 = 飢え・貧困
- ・貧困のウェビング、ビデオ視聴、貿易ゲーム
地球規模の問題の要因、現状、展望について考える
- ・科学的な社会認識の育成、問題解決学習、構成主義的知識の獲得、参加型学習

数学科

「数学からESDをとらえる『まなざし』の形成3」

- ・実践 - 「環境問題を資料から読み解く」
- ・環境問題の深刻さ、将来の影響度、今後の傾向の理解
- ・多様な価値観を意識した上で、批判的に分析し、解決方法を模索し公正な社会的判断をすることの必要性を実感できるような数学的活動を目的とする。

理 科

「ものづくりを通して考える力を育成する
理科教育の実践」

～ ハンズオン授業によって、ESDにおける
生徒につけたい力を育む ～

- ・実践 - 「パスタで橋をつくろう」
- ・力の存在を見いだす、日常生活と関連付ける、協
同で考える
- ・物理分野にもものづくり教育 - 「見えない」ものを
「見る」力を養う。

音楽科

「サウンドスケープから音ランゲージへ」
- ESDを視野に入れた音楽指導の試み -

- ・サウンドスケープした音を自然音と環境音に分け
る。
- ・人為的な環境音の多さ - 地球環境について考え
る。
- ・よりよい環境を将来に残すための自分たちの責任
の自覚

美術科

「鑑賞教育によるESDへのアプローチ～グループ
ディスカッション形式での対話をもたらす、作品鑑
賞の深化及びESD的可能性～」

- ・題材 - アンドリュー・ワイエス「クリスティーナの世界」、
フィンセント・ファン・ゴッホ「鴉の群れ飛ぶ麦畑」
- ・ディスカッションを通じた、コミュニケーション能力の
育成、多面的なものの見方の発見、より深い作品
理解

保健体育科

「本校生徒の体力の現状から課題をつかむ」
～ 体力の現状から体育授業を考える～

- ・過去5年間の体力テストの分析 - 本校生徒の体
力の現状、体育授業のあり方・役割
- ・社会情勢や生活様式と体力の関わり
- ・生涯スポーツ、地域スポーツや健康との関わりか
らみた課題について考える。

技術科

**「身のまわりのエネルギーを有効に利用しよう
とする態度を育てる学習指導の工夫」
- 風車の製作を通して -**

- ・エネルギー変換に関する技術への学習意欲喚起、
技術を適切に評価・活用できる能力とエネルギー
を有効利用しようとする態度の育成

家庭科

**「ESDを視野に入れた家庭科の授業の取り組み」
- 地産地消を意識したメニューづくり -**

- ・持続可能な社会をつくるためにはどのような生活
が望ましいのかを考え、生活を批判的に見つめる。
- ・地球環境に負担をかけない食材の選び方につい
ての理解を深める。

英語科

「地雷問題を考える - 英語学習を通して - 」

- ・カンボジアの地雷被害、子どもたちの犠牲を題材とした教科書単元
- ・地球市民の一人として課題に向き合う
- ・英文読解によるより深い理解と英作文での定着
- ・「ワンワールドフェスティバル」の資料を活用

特別支援学級

「特別支援教育におけるボール運動」 - バルシューレを取り入れた新しい取り組み -

- ・身体を動かす機会の減少による体力・運動能力低下、情緒の不安定、社会性の欠如等の問題解決のためのボール運動「バルシューレ」の障害児教育への取り入れ
- ・教材化と学習構成の工夫
- ・体育のつまずきの克服と仲間との協同に支えられた自己形成

生徒会活動



生徒会活動

- ・生徒の自主・自立・自治を目標とした社会参画につながる活動。
- ・全校生徒の活動。
- ・未来の主権者を育てる活動。



生徒総会のようす



生徒総会のようす



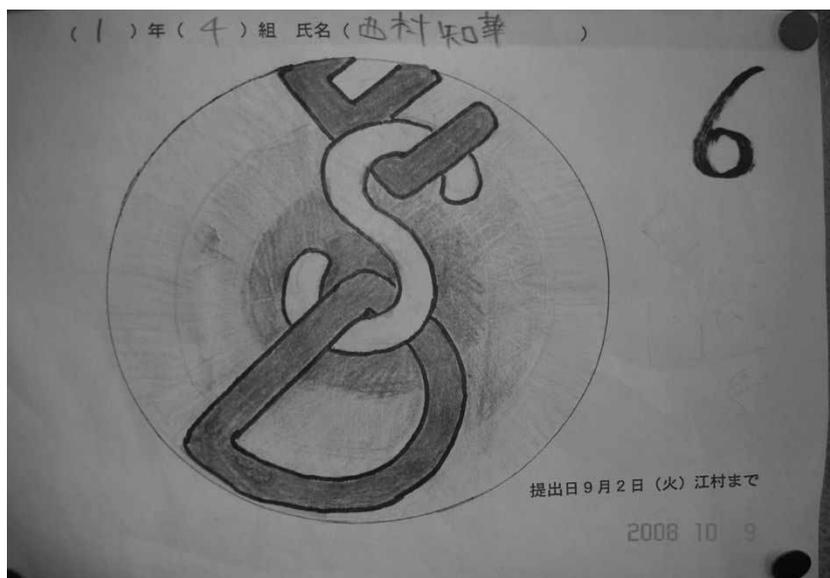
生徒総会でのESD啓蒙活動



ESDロゴマーク コンテスト



ESDロゴマーク コンテスト 応募作品



ESDロゴマーク コンテスト 優勝作品



東アジア子ども芸術祭



東アジア子ども芸術祭



東アジア子ども芸術祭



文化のつどい 合唱「Beautiful Name」



文化のつどい 展示「世界遺産」



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 生徒ブース発表



教育研究会 太鼓演奏



教育研究会 合唱



教育研究会 生徒会発表



附中生平和の集い 生徒会 劇



附中生平和の集い 生徒会 劇



附中生平和の集い 平和宣言 全校朗読



都南中学校生徒会との交流



都南中学校生徒会との交流



都南中学校生徒会との交流



ユニセフ募金(ハイチ地震)



ユニセフ募金(ハイチ地震)



中庭再生プロジェクト(アンネのバラ植樹)



中庭再生プロジェクト(アンネのバラ植樹)



中庭再生プロジェクト(アンネのバラ植樹)

生徒会活動

環境について考え、取り組む

- ・ 家族と一緒に1日エコライフ
春休み、夏休み、冬休みなど
長期の休みに行っている。
- ・ 校外クリーンキャンペーン
環境委員会と生徒会整美部を
中心にボランティアを集め、
佐保川周辺のゴミを拾い集め
て、きれいにする活動。

→先輩から引き継ぐ伝統行事

1日エコライフ レポート 実施日 () / () / ()

エコライフ項目	1日で減らせたCO ₂ の量	家族で実行できた人数	減らせたCO ₂ の合計量
①冷蔵庫の扉の開け閉めを少な化した。	12g	()人	()g
②レジ袋をもらわなかった。(エコバックを使った)	42g	()人	()g
③洗剤やシャンプーを使いすぎなかった。	48g	()人	()g
④シャワーのお湯はこまめに止めた。	86g	()人	()g
⑤部屋を出るときは電気を消した。	25g	()人	()g
⑥テレビをつけっぱなしにせず、見ていないときは消した。	45g	()人	()g
⑦暖房の温度をいつもより1℃低く設定した。	85g	()人	()g
⑧暖房を片付けてから掃除機をかけた。	8g	()人	()g
⑨白熱電球を電球形蛍光灯に交換した。	36g	()人	()g
⑩自動車などを乗らずに徒歩・自転車・電車で移動した。	400g	()人	()g

1日エコライフに取り組みだした家族の人数→()人 ()年()組
減らせたCO₂の総合計→()g 8組()

<とくりんだ感想>

家族のみなさんが協力してくれて、自分たちでもできる項目で頑張ることができた。必ず月2日に集めます。

⑩フンドマイレージアンケート⑩
Q1. 長靴を買う時、明原産園をチェックしますか? (はい・いいえ)
Q2. 地産地消という言葉を知っていますか? (はい・いいえ)
ご協力ありがとうございました!!

※9月2日に集めます

日常的な活動から、 世界に目を向けた活動へ

1. 日常的な活動
 - ・世界寺子屋運動
 - ・ペットボトルキャップの回収
 - ・書き損じはがきの回収
 - ・ベルマークの回収
2. 交流活動
 - ・ユネスコ子ども芸術祭
in 奈良
 - ・韓国の中学校とのテレビ
会議（予定）

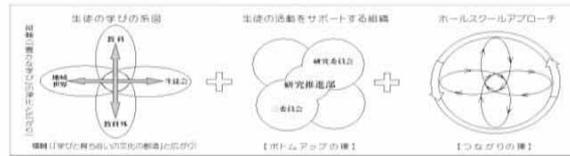
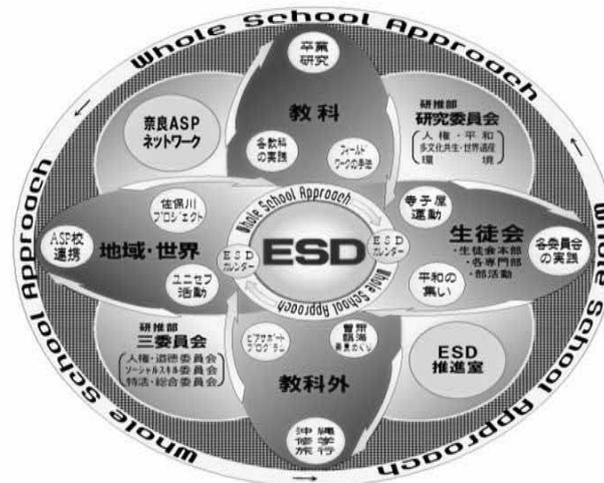


未来に向けて舞い上がるアプローチ

国連・国際機関、政府・文部科学省、教育委員会、校長などからこれまでのように降り立つアプローチではなく、子どもたち、教員・学校、保護者・地域などから未来に向けて舞い上がるアプローチに絞って考えていきたい。

(成田喜一郎氏)

ESD推進のための往還図



研究発表4

特別支援教育研究センターにおける 地域に根差した実証的研究プロジェクト

奈良教育大学特別支援教育研究センター

岩坂英巳

2010.3.30.

奈良教育大学特別支援教育研究センター

目的

- 1. 特別支援教育にかかわる理論と実践に関する研究の実施
- 2. 特別支援教育を担う人材の育成
- 3. 地域における児童生徒の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進

(2007年~2009年文部科学省
概算要求 + 学内予算による)

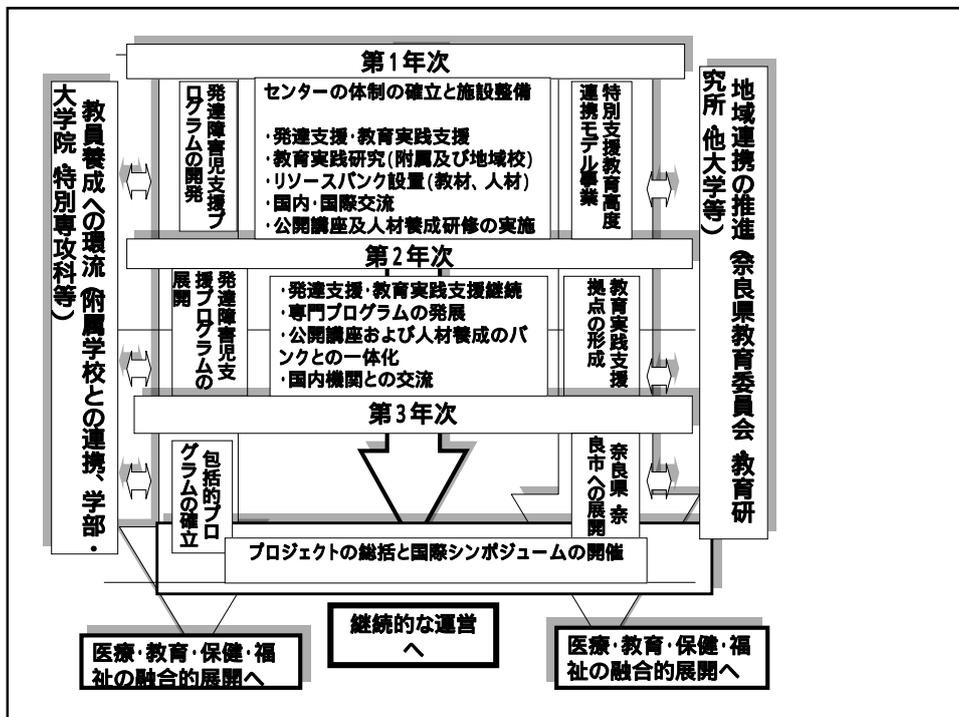
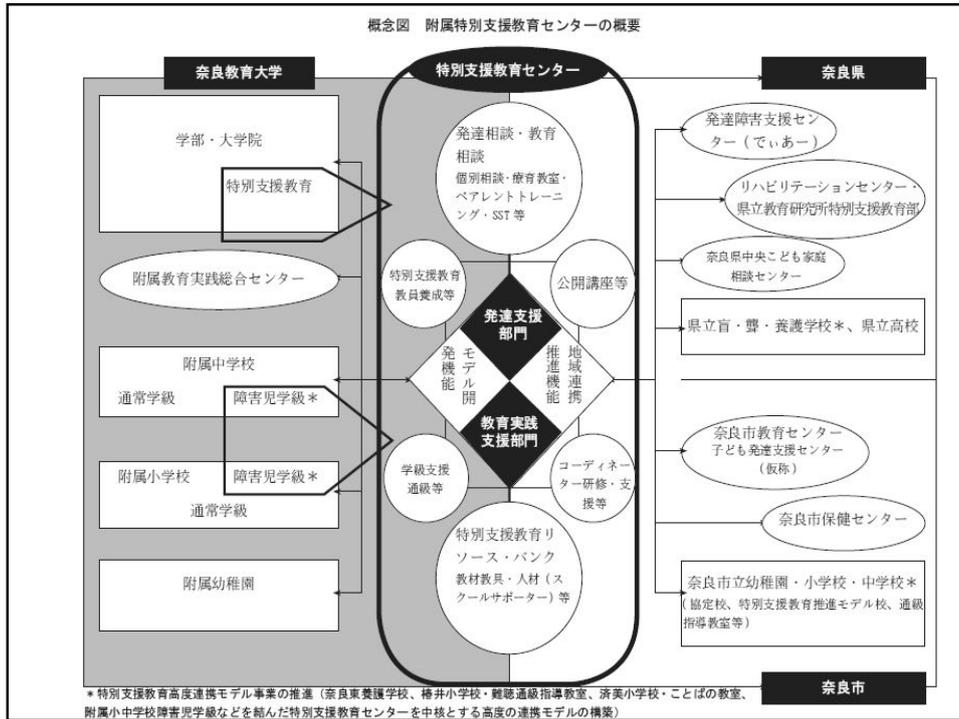




センター スタッフ

- センター長 精神科医師【岩坂】
- 特任教授 元養護学校校長【河合淳伍】
- 特任准教授 元小学校教員(特別支援教育SV, 学校心理士)
【松浦直己】
- 相談員(2名)
臨床発達心理士【植村里香】、作業療法士【宮崎瑠理子】
(2009年度より3名に増員【武藤葉子】)
- 事務員【武藤葉子、大久保直子】

- 他に、兼務教員(本学特別支援教育教室) 3名
【玉村公二彦、越野和之、根來秀樹】
スタッフの勤務日数は週1日か2日である(センター長以外)



センター設置前に 議論されたこと

- 1. 学校、教育委員会、その他関係諸機関との連携を重視すること
- 2. 「大学」としての専門性を前面に出すこと
「教育」を重視しつつ、さまざまな子どもの専門職のコラボ
- 3. 教員養成機関としての役割も担うこと
- 4. 付属学校園とのさらなる連携強化と地域への発信

大学附置の「センター」とすることで、対外的に見えやすく、利用しやすく、連携しやすくしていく
(一部有料事業も行う)

センター 機能

<相談部門>

- 1. 発達支援(本人・保護者向け)
 - 個別発達相談*
 - 集団専門プログラム*
SST、ペアレントトレーニング*有料
- 2. 教育実践支援(先生向け)
 - 来所相談
 - 巡回相談
 - モデル校とのプロジェクト
SST、CBT、学校版PT(TT)
教育委員会や学校との連携が前提

<研修、人材育成部門>

- 1. 公開講座*
 - 2. 支援員養成講座*
 - 3. 専門プログラム養成講座*
 - 4. 学生ボランティア研修
- *有料

<その他>

- 1. 特別支援教育リソースバンク
- 2. 学外研究員制度
- 3. 広報啓発(センター便り、HP)

実証的研究も併せて行っている

センタープロジェクト

- 1. PTの効果判定と新たなプログラム(幼児版、学校版)の開発、あわせての人材養成
- 2. SSTの効果判定、センター版SSTの開発と連携を兼ねた実践、さらに学校版SSTの開発と実施
- 3. センター独自のチェックリストと移行支援の支援計画モデル作り
- 4. TTやSSTを取り入れてのモデル的特別支援教育の推進
- 5. スクールサポーターなど学生ボランティアや特別支援教育支援員の養成およびリソースバンク
- 6. 地域の特別支援教育の核となる人材養成
- 7. 広報普及(教育関係から保護者まで)

センター 機能

<相談部門>

- 1. 発達支援(本人・保護者向け)
 - 個別発達相談*
 - 集団専門プログラム*
SST、ペアレントトレーニング
 - *有料
 - 2. 教育実践支援(先生向け)
 - 来所相談
 - 巡回相談
 - モデル校とのプロジェクト
SST、CBT、学校版PT
- 教育委員会や学校との連携が前提

<研修、人材育成部門>

- 1. 公開講座*
 - 2. 支援員養成講座*
 - 3. 専門プログラム養成講座*
 - 4. 学生ボランティア研修
- *有料

<その他>

- 1. 特別支援教育リソースバンク
- 2. 学外研究員制度
- 3. 広報啓発(センター便り、HP)

実証的研究も併せて行っている

センター 機能

<相談部門>

- 1. 発達支援(本人・保護者向け)
- 個別発達相談 *
- 集団専門プログラム *
SST、ペアレントトレーニング
* 有料
- 2. 教育実践支援(先生向け)
- 来所相談
- 巡回相談
- モデル校とのプロジェクト
SST、CBT、学校版PT
教育委員会や学校との連携が前提

<研修、人材育成部門>

- 1. 公開講座 *
- 2. 支援員養成講座 *
- 3. 専門プログラム養成講座 *
- 4. 学生ボランティア研修
* 有料

<その他>

- 1. 特別支援教育リソースバンク
- 2. 学外研究員制度
- 3. 広報啓発(センター便り、HP)

実証的研究も併せて行っている

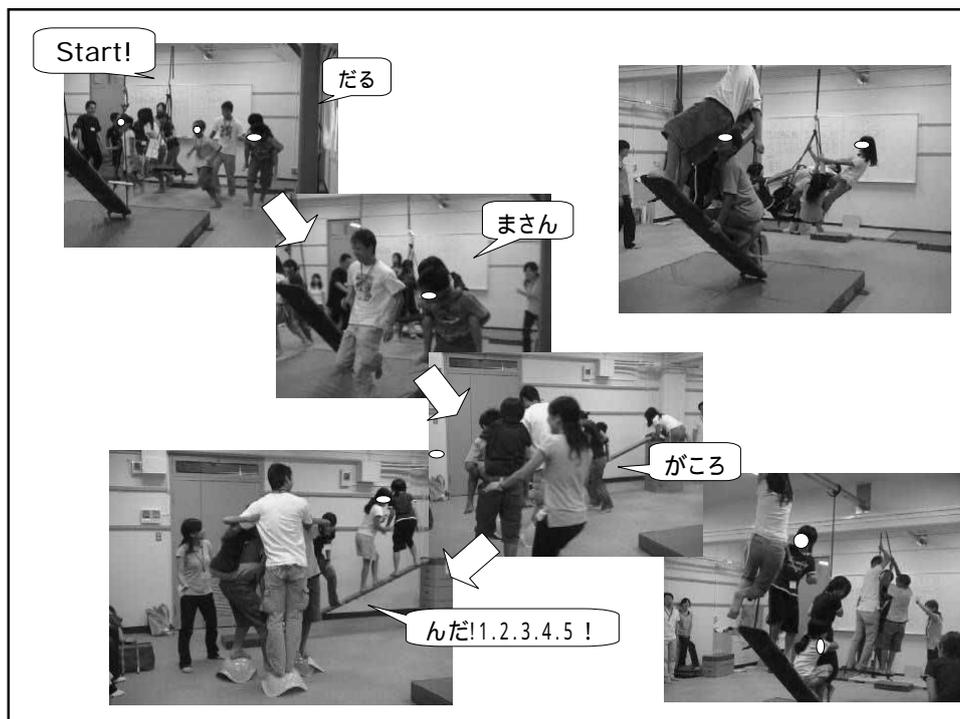
専門プログラムをどう発展させていくか ペアレントトレーニング(PT)の場合

- 1. 発達相談としてのPTの実施
- 2. PTスタッフとしてのセンタースタッフ、大学院生の参加
- 3. PT準スタッフとしての地元関係機関職員の参加
(発達障害者支援センター、保健センター、子ども家庭
相談センター、療育機関など)
- 4. 地元・他府県からの見学者の受け入れ
- 5. 夏期集中研修
2日間PT養成講座、1日TT(PT学校版)
- 6. 学校現場でのTTの展開
- 7. 関係機関でのPT改訂版(幼児版など)実施への協力

専門プログラムをどう発展させていくか SSTの場合

- 1. 発達相談としてのSSTの実施
- 2. SSTの一環としての学校訪問による積極的連携
- 3. SSTスタッフとしてのセンタースタッフ、大学院生の参加
- 4. SST準スタッフとしての地元関係機関職員の参加
(発達障害者支援センター、子家相、学校、療育機関など)
- 5. 地元・他府県からの見学者の受け入れ
- 6. 夏期集中研修、出前研修
1日SST学校版研修、センターSSTプログラムの紹介
- 7. 学校現場でのSSTの展開
特別支援学級、通級教室、通常学級





A校のSSTの流れ(通級指導)

エピソードカード等からの情報収集

(担任・保護者・観察)

SST

生活単元学習(サバイバルスキル)

般化(通常学級・家庭で使える)

フィードバック(口頭・エピソードカードから)

再SSTや個別指導

SSTの指導目標

- 子どもの全体的な社会性を高める
- 不適切なソーシャルスキルが定着していると思える(いじめ、不登校、孤立など)さまざまな問題を改善し、予防する

特別支援教育のモデル的取り組み

指導項目

- ルールを守る
- マナー
- セルフコントロール
問題解決・葛藤解決・自己調整力
- 友だち関係
- コミュニケーション
聞く・話す・主張性・話し合い・場面理解
・先生との関係

通級でのSSTのまとめ

- 取り出し指導を行うことで、児童の課題(行動観察、担任・保護者からの情報収集)をつかみやすい
- フィードバックを行いやすい
- 迅速な指導ができる
- 生活單元などの場での般化を促進しやすい
- SSTを学校で行うことで、早期に適切なスキルを獲得するとともにセルフエスティームを高めることができ、二次障害を予防できると期待できる。

実施計画「ほのぼの☆ふれあいタイム」(通常学級)

学年	授業回数	指導内容	グループ・組	日程
第3学年	第1回	話し方・聴き方	A:1組・2組 B:4組・5組	10月11日 1月19日
	第2回	気持ちを分かる	A:1組・2組 B:4組・5組	10月25日 2月2日
	第3回	温かい言葉をかける	A:1組・2組 B:4組・5組	11月8日 2月16日
第5学年	第1回	話し方・聴き方	C:1組・4組 D:2組・5組	10月13日 10月20日
	第2回	温かい言葉をかける	C:1組・4組 D:2組・5組	10月27日 10月31日
	第3回	ストレスの対処法	C:1組・4組 D:2組・5組	11月10日 11月17日
第1学年	第1回	話し方・聴き方	1組	1月17日
	第2回	仲間の誘い方	1組	1月31日
	第3回	温かい言葉をかける	1組	2月14日

通常学級でのSSTの効果

- 学級集団づくりに役立った
- 学級全般で、スキルとセルフエスティームが向上する傾向がみられた
- 特別な支援が必要な児童への他の児童のかかわりがかわった

センター 機能

<相談部門>

- 1. 発達支援(本人・保護者向け)
- 個別発達相談*
- 集団専門プログラム*
SST、ペアレントトレーニング
*有料
- 2. 教育実践支援(先生向け)
- 来所相談
- 巡回相談
- モデル校とのプロジェクト
SST、CBT、学校版PT
教育委員会や学校との連携が前提

<研修、人材育成部門>

- 1. 公開講座*
- 2. 支援員養成講座*
- 3. 専門プログラム養成講座*
- 4. 学生ボランティア研修
*有料

<その他>

- 1. 特別支援教育リソースバンク
- 2. 学外研究員制度
- 3. 広報啓発(センター便り、HP)

実証的研究も併せて行っている

特別支援教育を担う人材養成

～ 地元教育委員会、学校、NPO団体との連携

- 1. 特別支援教育支援員養成講座
連続講座(主催講座7回、推薦講座5回)
7回の受講で「修了証」の発行
- 2. 学生ボランティア支援
学校現場でのボランティア活動で特別支援にかかわっている学生への個別支援・連携、および相談会
- 3. 特別支援教育リソースバンク
支援員養成講座修了者名簿の作成・市町村教委へ送付
- 4. 学外研究員制度
特別支援教育モデル的取り組み校とのコラボ
地域の核となる先生のフットワークの確保

特別支援教育のシステムを推進するために重要と思われること

～ センター設置1年半を経過して

- 1. 人材養成
専門性とコーディネート力を持った教員
学生ボランティアや支援員の有効活用
- 2. 学校内での意識改革
皆が、チームで、支援が必要な子どもにかかわる
これまでの経験知を活かす(「学級集団作り」は基本)
「こうであらねば」「この子はどうなりたいか」
- 3. 関係諸機関の連携
幼・保 小 中 高 進学・就職(自立)へ
- 4. PDCA(Plan Do Check Action)
本人評価のもとにやってみて、ふりかえり、前進する

センターとしての これからの課題

- 1. 現場の温度差
学校レベル、教育委員会レベル
- 2. 早期支援からのつながり
幼児期からの支援(付属幼稚園、行政との協力)
- 3. 就労に向けてのつながり
- 4. 教員養成のなかでの特別支援教育の位置づけの弱さ
学生は困ってからでないと気づかない、子どもが何に困っているかに気づけていない
- 5. 本人・保護者と学校側の橋渡し
守秘義務に留意しながら、中立的で専門的ななかかわりを

「絵にかいた餅」
ではなく、
「餅は餅屋」の
特別支援教育へ



研究発表 5

平成20年度学長裁量経費

「教職大学院における研究紀要の 作成、及び院生の研究環境支援に 関するプロジェクト」報告

安藤輝次 池島徳大 小柳和喜雄 粕谷貴志
松井秀史 松川利広 吉田明史 吉村雅仁
(教職大学院専任)

2010.3.30

報告の柱

- プロジェクトの目的
- プロジェクトの期間と経費の支出概要
- プロジェクトの成果
 - 研究支援のため、図書・雑誌をそろえ、図書室を機能させる学習環境整備について
 - 教育・研究の成果を、研究紀要の形で出版することについて
 - 院生の研究支援のため、院生主催の講演会を開催することについて

プロジェクトの目的

- 本プロジェクトは、平成20年度4月より開設された教職大学院(教育学研究科専門職学位課程)において、以下3つの目的を達成するために行われたものである。
 - － 教職大学院の院生の研究支援のため、図書・雑誌をそろえ、図書室を機能させる。
 - － 教職大学院における教育・研究の成果を、研究紀要の形で出版し、院生および教員の研究の実績をつくる。
 - － 教職大学院の院生の研究支援のため、院生主催の講演会を開催支援する。

プロジェクトの成果

- 「教職大学院の院生の研究支援のため、図書・雑誌をそろえ、図書室を機能させる」についての成果
 - － 教職大学院で活用頻度が高く、図書館に全てが入っていないシリーズなどを中心に(重なりも考慮して)、図書の充実を図った。

図書の実



- 「教職大学院における教育・研究の成果を、研究紀要の形で出版し、院生および教員の研究の実績をつくる」についての成果
 - 平成20年度研究成果を研究紀要と言う形でまとめることを行った(写真参照)。ISSN(1883-6585)に登録を行い、創刊号の刊行を行い研究成果の評価を問う試みを行った。
 - 本学で3冊目の研究紀要(学部紀要・教育実践総合センター紀要に続いて)
 - 他の2つの紀要とは異なり、院生単独で実践研究に関する成果を発表できる点に特徴がある(審査基準を用い、論文はレフリーが2人、研究報告と資料に関してはレフリー1人の査読を経る。)
 - 他の2つの紀要とは異なり、奈良県の全ての小学校・中学校・高等学校・各教育委員会、及び全国の教職大学院・文部科学省・国立国会図書館ほかに郵送により献本を行い、成果の公開と外部評価を得ている(また他の2つの紀要と同様に、デジタルデータによって、ダウンロードも可能としている)
 - 「活動記録」のページを設け、教職大学院の各行事・講義・演習の様子、全会議の概要が収録し、活動全体を知ってもらおう努力をしている。

- ・ < 論文 >
- ・ (1) 学校ケースメソッドによる学校問題解決 (安藤輝次・井上英樹)
- ・ (2) ケースを通して悩みを交流し解決する (安藤輝次・和田恵美子)
- ・ (3) ミドルリーダーのメンターリング力育成プログラムの萌芽的研究 (小柳和喜雄)
- ・ (4) いじめの学校教育臨床的支援に関する一考察 (池島徳大)
- ・ (5) 卒業後のキャリア発達に寄与するキャリア教育の検討 (河崎智恵・川端亜紀子)
- ・ (6) 「動きのリズム化能力」を学ぶマット運動の実践開発 (中井隆司・高橋功太郎・松本雅宏)
- ・ (7) 学校危機管理 (以呂免義雄)
- ・ (8) 要約に着眼した言語能力表の作成と年間指導計画の構想 (松本哲)
- ・ < 研究報告 >
- ・ (9) 学部から大学院につながる体系的な観察実習の方法 (小柳和喜雄)
- ・ (10) 活用の足場を作る算数科単元設計の在り方 (福本義久)
- ・ (11) 教員に求められる能力の調査と研究 (後藤佳代)
- ・ (12) 学校組織の活性化に向けて (棚橋浩一)
- ・ (13) 生徒同士の間関係形成能力を高めるピアサポートプログラムの開発に向けての予備研究 (川畑恵子)
- ・ (14) 小学校外国語活動のカリキュラム開発 (浅尾小百合)
- ・ < 活動報告 >



「教職大学院の院生の研究支援のため、院生主催の講演会を開催支援する」についての成果



PeD professor i pedagogik
Michael Uljens (マイケル ウーリエン)

講演タイトル: フィンランド教師教育における理論と実践
学校教授学の歩みから、現在の学校での実践まで
Theory and Practice of Teacher Education in Finland.
From "A History of School Didactics" to "Trend on School Practice"

講演に対するコメント
中野和光 (教育学博士) (日本教育方法学会代表理事)
(美作大学教授 大学院人間発達学研究所)

フィンランド教育学会副会長
Uljens教授 (Faculty of
Education, Åbo Akademi,
University, Vasa, Finland)

コーディネータ
小柳和喜雄 (教育学博士) (奈良教育大学 教職大学院)

- (講演要旨とウーリエン先生からの言葉): フィンランドにおける教師教育のアイデアは、教育理論と研究を教育実践と高いレベルで融合していくことです。現在の教師教育の構造がどのような歴史的な見通しの下で発展してきたかを知ることは、日本のみなさんにとっても大変有益であると考えます。この講演は、フィンランド人の教育的思考のルーツを明らかにし、教師教育がどのように現在組み込まれているかを提示するものです。そして、学校での教育活動で現在挑戦されている様々なことがここで話されるでしょう。みなさんとお会いできるのを楽しみにしております。

- 日 時 2009年3月26日(木) 13:30 ~ 16:00+

- 場 所 奈良教育大学教職大学院棟 1F (すばる)

- 13:30 ~ 13:35 ご挨拶、講演会の趣旨説明
- 13:35 ~ 15:00 講 演
- 15:00 ~ 15:15 講演に対するコメント
- 15:15 ~ 16:00+ 質疑応答



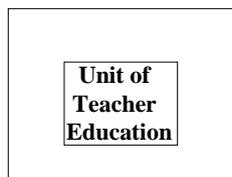
**フィンランドにおける教師教育の理論と実践
学校教授学の歩みから学校での現今の教育実践まで**
マイケール・ウーリエン教授

- まず最初に、日本へまた大学へ招聘してくれた奈良教育大学、そして学長の柳澤先生にお礼を申し上げたい。そして、この訪問の支援やアレンジしてくれた同大学の小柳教授にもお礼を言いたい。
- 我々、フィンランド人は、科学・文化・経済において成果をあげている日本に憧れと関心を持っています。そのような日本へ招待をいただいたことは、私にとって名誉です。
- また、フィンランド教育学会 (Finnish Association of Educational Research: FERA) からのご挨拶を申し上げたい。私の勤務しているアボアカデミーの学長、学部長も私の日本への訪問を喜んでくれています。
- そのような日本で講演ができることはとてもうれしく思います。しかし、日本語を私は十分使うことができないので、外国語で本日講演させていただくことをお許しいただきたい。
- これから述べる私の話は、4つの部分に分かれています。
- 1つ目は、フィンランドにおける教授学と教育の歴史的歩みです。
- 2つ目は、フィンランドにおける研究ベースの教師教育 (Research based teacher education in Finland) です。
- 3つ目は、分析的学校教授学 (Critical School Didaktik: CSL)、理論とその応用です。
- 最後に、4つ目は、これからの展望、です。．．． (以下、配布資料参照)



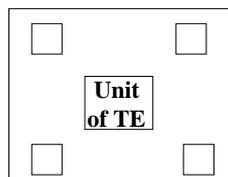
Organization of Teacher Education in Higher Education Institutions

Integrated model



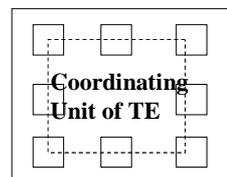
- TE in a separate and integrated unit
- Strong, independent organisation
- Complex multi-disciplinary organisation
- Problems with high competence in different subject areas
- Usually strong teacher identity
- Pedagogy/Didactics emphasised

Asymmetric matrix model



- Part of TE in one unit
- Part of the program Subject Matter departments
- Possibilities to utilize the subject matter competence outside the unit
- Risk for fragmentation of TE
- Subject Matter studies emphasized

Matrix model



- TE decentralized to different departments
- TE - administrative centre
- Strong subject matter competence
- Pedagogy/Didactics weak
- TE – weak position in the higher education institution
- Research in general Pedagogy/Didactics weak

A Research based Concept for Teacher Education

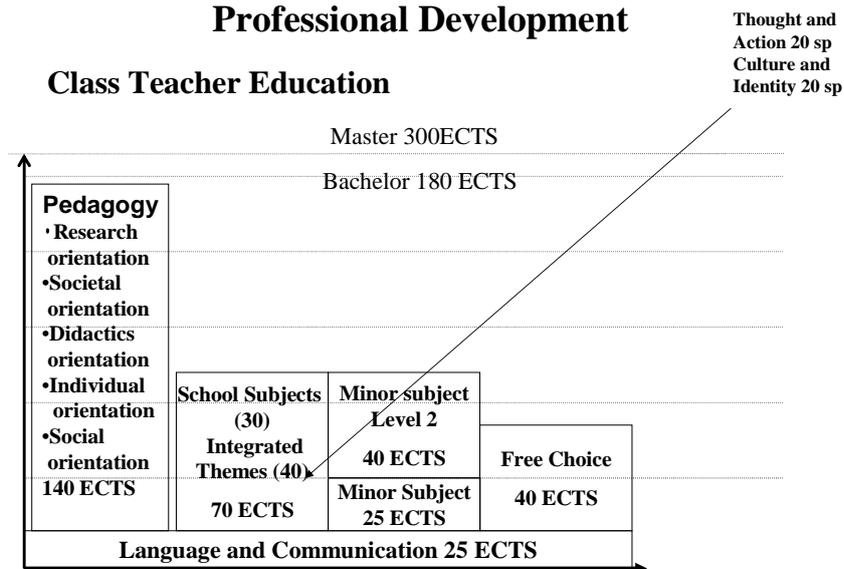
- **University integrated programme on master level (3 + 2)** (Introduced 1979)
 - **Education which unifies different categories of teachers**
 - Common unit for all teachers: Educational/pedagogical teacher studies 60 ECTS
 - Education (Pedagogy) main subject in the programme for class teachers
 - *To be a teacher* in focus, *teacherhood*, *teachership*
 - Subject Disciplines main Subjects for Subject Matter Teachers
 - Emphasis on Subject Didactics
 - Strengthening the relationship between theory and practice orientation
- **Direct entrance** (Subject Matter Teachers)
- **State practice schools will remain**
 - **Sub ordinate Faculties of Education**
 - Supervised teaching practice: three part cooperation
 - **Development of research about practice**
 - Supervision in focus

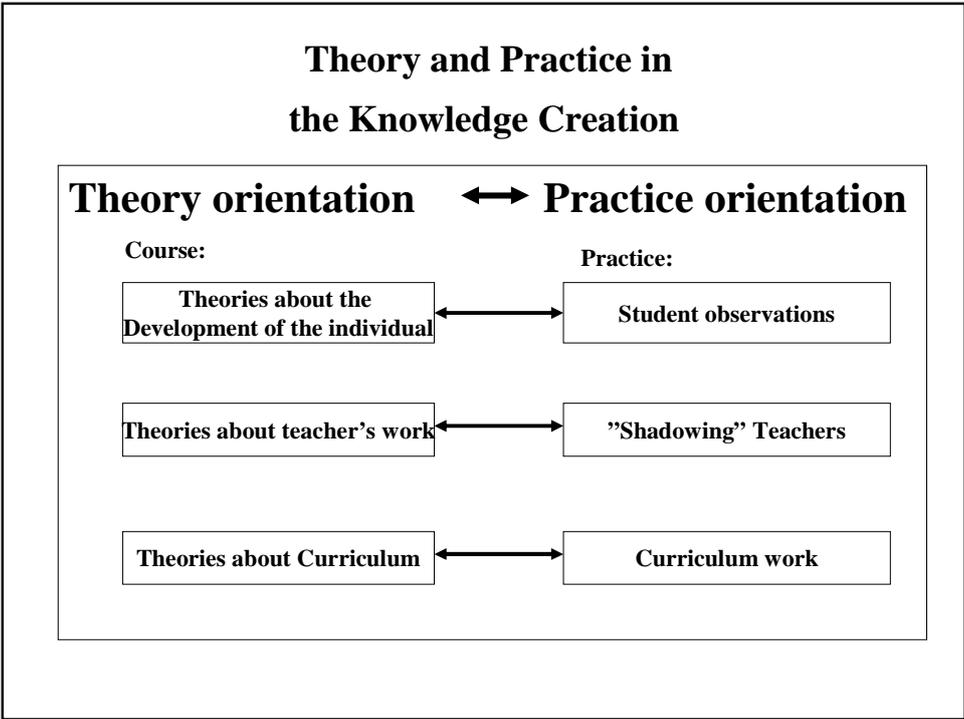
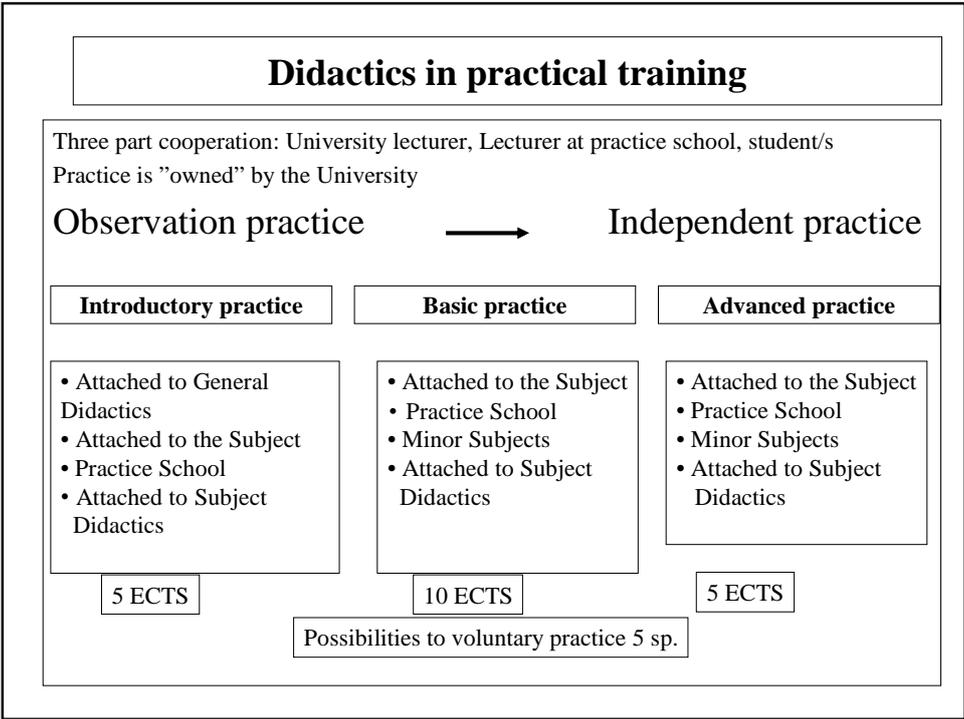


From: *Teacher Education 2020*, 44: 2007 Promemoria,
Ministry of Education

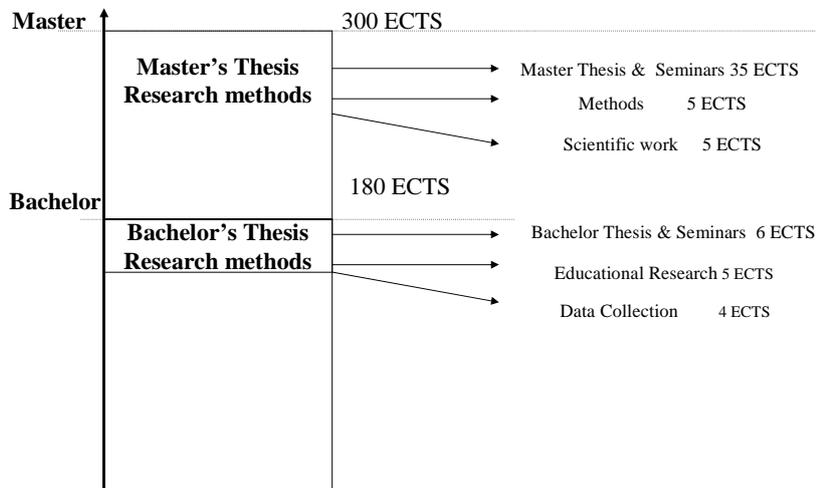
The inner Organisation as Instrument for Professional Development

Class Teacher Education

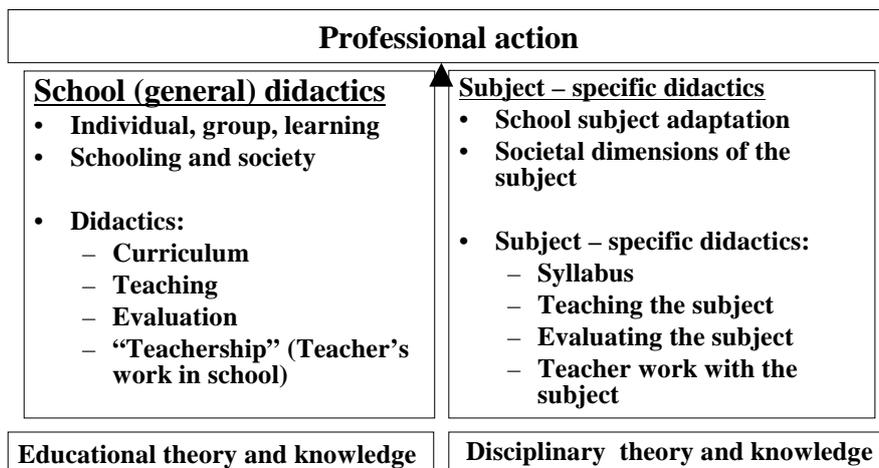




A Research based Design as Instrument for Professional Development.



Functional Division between School Didactics and Subject Didactics



Ambitions behind a research-based approach

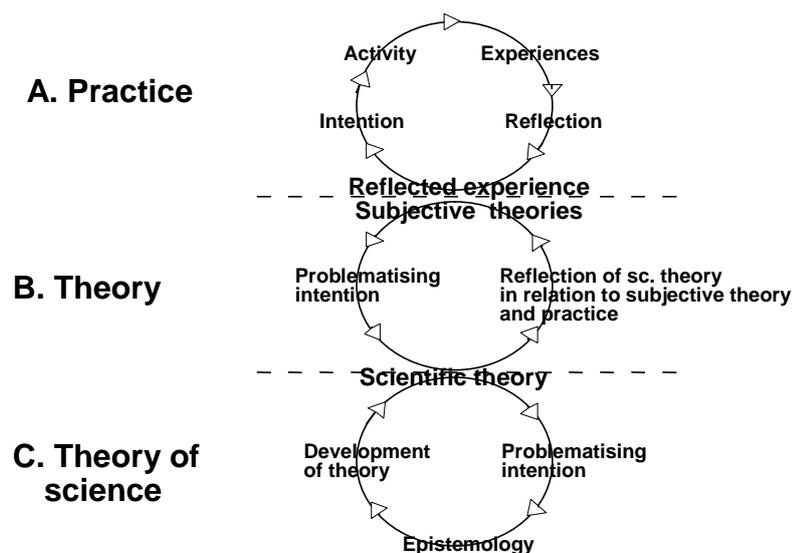
For the individual development:

- ▶ To develop a critical awareness
- ▶ To train the ability to analyse: to deconstruct and to reconstruct
- ▶ To train teachers to become good consumers of research
- ▶ To promote teachers' intellectual and personal development
- ▶ To reflect is good in itself: quality of life

For the collective development:

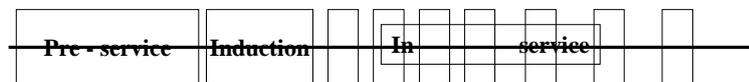
- ▶ To expose perceptions and ideas for collective examination
- ▶ To think systematically together
- ▶ To develop a professional language (common conceptual language)
- ▶ To open for the transforming potentiality of collective reflection
- ▶ To reflect collectively promotes quality and professionalism
- ▶ To promote the quality of teachers' work

Levels of pedagogical thinking in CSD



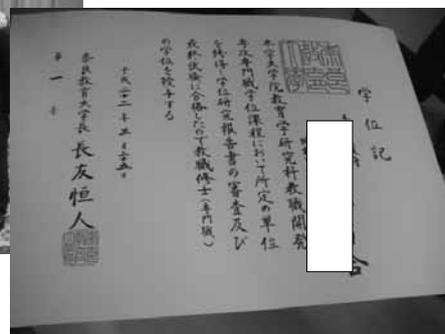
Further qualification of Teachers

- Current theme within the Finnish discourse about teacher education
- Large supply of In-service Education
- Many actors
- Weak link between pre – service and in – service education
- Weak long term planning
- Diffuse principles for financing substitutes
- Weak connection between current research and In-service education
- Requirements for a uniform model for financed participation
- The potential for research under utilized



Systematized, long term and research based in – service approach

ご支援ありがとうございました
平成22年3月25日第1期生が修了いたしました



研究発表 6

発表番号 6

「卓越した教師力」の育成に向けた教職科目体系のモデル開発に関する研究

～科目連携によるカリキュラム・フレームワーク（Cuffet）の構造的深化・発展～

2010/3/30

奈良教育大学

課題意識

✧ 本学の教員養成カリキュラムの課題

1. 教職のコアとなる教職科目群における科目区分はあるものの、相互の連関と方向性を示す体系や系統性に乏しい
2. 教育実習との往還性が十分でない
3. 教科教育科目群と教科専門科目群との関連性が乏しい

奈良教育大学

目的

- ✦ 多様な観点から振り返りを行える省察力を育成する教員養成カリキュラムの開発
 -) 「卓越した教師力」深化
 -) 「卓越した教師力」の学生のめあてとしての基準設定
 -) 教職科目群の体系化
 -) 教師力サポートオフィスの設置

奈良教育大学

計画

- 「現代教師論」（教職専門科目）などの検討
- 教職科目群の体系化の構想
- 「卓越した教師力育成のための100冊」の選定
- 2回生向けの教育実習科目の試行
- 教師力サポートオフィスの役割・組織体制の検討

奈良教育大学

具体的成果

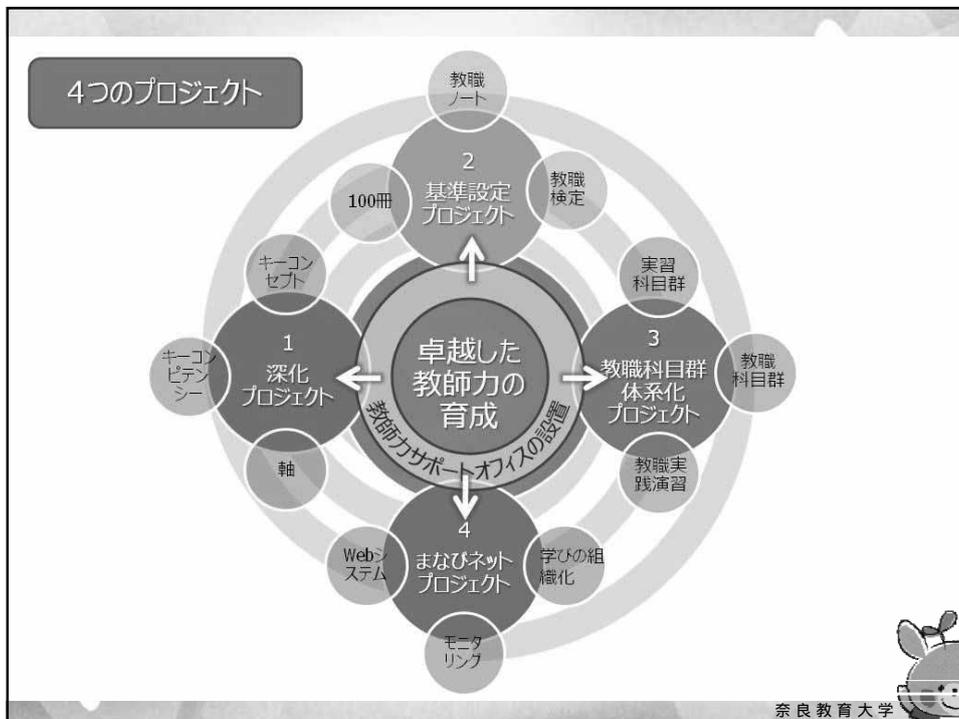
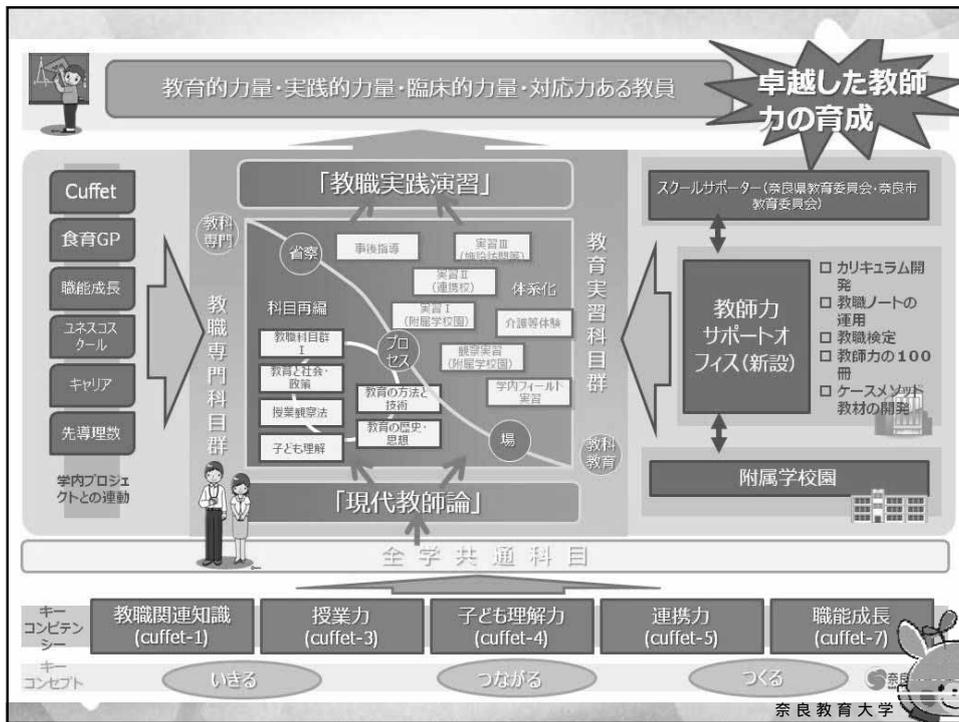
「現代教師論」（教職専門科目）などの検討

- (1) 平成21年度の展開の主な改善点
- (2) 平成20年度「現代教師論」の実践
- (3) 「現代教師論」の成果
- (4) 今後の課題

具体的成果

教職科目群の体系化の構想

- (1) 「卓越した教師力」深化
- (2) 基準設定
- (3) 教職科目群体系化



具体的成果

2 回生向けの教育実習科目の試行

- (1) 教育実習プログラムの見直し
- (2) 「教育実習入門」(2 回生) 試行

具体的成果

教師力サポートオフィスの役割・組織体制の検討

- (1) 教師力サポートオフィスの主な役割
- (2) 体制

教師力サポートオフィスの業務

人員：任期付き教員1名、事務員1名

1 マネジメント

- ❑カリキュラム全体の設計・実施・点検・評価改善
- ❑教職ノート編集・実施・点検・評価改善
- ❑現代教師論および教職実践演習の実施補助

2 コーディネーション

- ❑教師力深化プロジェクトの運営・とりまとめ
- ❑教職検定(教師力ミニマム・チェック)の問題作成依頼・とりまとめ
- ❑「教師力100冊」の選定依頼・整理
- ❑ケースメソッド(鍵的場面)教材の開発

3 コンサルテーション

- ❑教職科目群担当教員への指導・助言
- ❑附属学校教員への指導・助言
- ❑履修学生への指導・助言

4 コーポレーション

- ❑奈良県教育委員会・県下の市町村教育委員会との連携調整(新任教師力のすりあわせ)
- ❑教師力に関するパネルディスカッションの開催(大学、教育委員会、学生)
- ❑外部評価委員会の運営

奈良教育大学



発表番号 6

「卓越した教師力」の育成に向けた教職科目体系のモデル開発に関する研究

～科目連携によるカリキュラム・フレームワーク(Cuffet)の構造的深化・発展～

ご清聴ありがとうございました

奈良教育大学



6 . 外部評価委員会 - 1 における評価について (審議記録)

平成 2 2 年 3 月 3 0 日 (火)

1 6 : 0 0 ~ 1 6 : 4 0

出席者 : 外部評価委員会委員 (6 名)

【委員長】

奈良教育大学の第 1 期中期計画に外部評価の実施が挙げられています。この中期計画の趣旨に従って、この外部評価委員会を開始いたします。委員の皆様のご協力を仰ぎながら、委員会を進めていきますので、よろしくお願いいたします。

学長裁量経費によるプロジェクト研究の発表や評価は、各大学でそれぞれに独自の取り組みがあるとお聞きしましたが、学長裁量経費によるプロジェクト研究の成果の外部評価を実施するというのは、奈良教育大学の独自の取り組みとして高く評価できるのではないかと考えますので、その趣旨にそってこの委員会を進めたいと思います。

委員会の進め方ですが、まずそれぞれのご専門の研究テーマのところでご意見をいただいたうえで、各テーマについて共通して意見交換をするということによろしいでしょうか。

委員の皆様は、すでに先ほどの発表会での質疑応答でも発言されていますが、その発言と重なっても結構ですので、それぞれのご担当の研究テーマについて、5 分間程度でご意見をいただきます。このご意見が議論の中心になっていきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、研究発表 1 から順番に始めます。

研究発表 1 への評価

【A 委員】

失礼いたします。まず、最も大きな成果の一つですばらしいと思ったのは、『バルシューレに基づくスポーツプログラム』が教材作成にまで至っている事です。そこまで成し遂げられたことは、とてもすばらしい成果だと思えます。単なる翻訳版ではなく、ドイツと日本の実情の違いを具体的に踏まえた上で、単に子供の体力を高めるためというだけでは

なく、運動能力を育むという視点を導入し、どのようなプログラムを編成すればいいのかを考えて、奈良教育大学版を作成しておられます。これはかなり労力と時間のかかる取り組みであったと思います。先駆けとなる科研費での研究があったとはいえ、ここまで取りまとめられたのは、優れた成果と言えます。

ただ、ドイツの場合は、学校教育としての体育が地域スポーツと密接な関係にあるという側面があるため、本プロジェクトも生涯スポーツとのかかわり、地域とのかかわりという方向へ発展していくことは自然な流れであろうと考えます。

今日、詳しくお話を聞かせていただいて、これは、教員養成に関わる体育科、保健体育科の教科教育の授業の内容編成の在り方に有用な示唆を与えてくれるものとも考えます。とりわけ、球技については、種目ごとに内容を例示するのではなくて、それぞれの種目の基礎になる動きを小学生の低学年から系統的に学習させるという方向に変わりましたが、その流れからすると、このバルシューレを基にしたプログラムは、低・中学年の内容として重要な意味を持つてくるものとなります。

教科教育あるいは、教科の専門科目の中で、体育固有のカリキュラム内容としてさらに発展、充実が期待できるだけでなく、附属学校園や地域社会と連携して、さらなる成果を上げていくことに多大の可能性を有した取り組みであると考えます。

【委員長】

ありがとうございます。それでは、次に研究発表2に移ります。お願いします。

研究発表2への評価

【B委員】

研究発表2では、3つのテーマがありました。先ほどの質疑応答でお話ししましたが、繰り返してお話ししたいと思います。

最初の『カリキュラム・ヴィタエ』については、私は、いまひとつカリキュラム・ヴィタエがよくわかりません。具体的なところで、ポートフォリオと何が違うのか、勉強不足というか、専門外なものですからよくわかりません。

「教育実践演習」は、次年度からですか、導入されることで、うちの大学では、ポートフォリオを取り挙げるという話になっています。それを具体化していく上でも参考となり、この取り組みは非常に先導的かつ実証的ですね。非常にすぐれた研究というふうに私

は思いました。

これから多分いろんな大学でこのようなポートフォリオのようなものを扱っていくと思いますが、この成果をぜひ発信していただいて、いろんな大学で活用できるようにしていただければ、興味深いと思いました。

2つ目の『身近なフィールドから学ぶ教育プログラム』というテーマは、非常に大学の特色を生かしておられます。この奈良教育大学の中の自然の様子や周りの自然環境を非常に生かして、なおかつ環境と自然を有機的に連携した学際的な研究というように思いました。

デジタル図鑑は、アクセス数3,000回ということですから、かなり利用されていると思います。実際に見ても、かなり細かく詳しくできています。それから、何と言っても、大学の中のどこにどういう生き物があるかが、それを見てわかるのは非常に良いと思いました。

ただ、デジタル図鑑は、家の中でパソコン見ることになってしまいます。行った現場で、これは何だか知りたいと言った時には、ポケットに入るような図鑑のほうがいいのではないかと、どっちがいいんだろうかなと。さっきも質疑応答で言いましたけど、今、携帯電話をみんな持ってますし、非常に有効に使えます。それをもっと有効に使うと、新しいデジタル図鑑ができるのではとの期待を持って聞いていて思いました。だから、例えば携帯電話で写真を撮って、これを見て、これがどういう植物なのかがわかるようなシステムができると、非常に面白いと思いました。

これは大学キャンパス内だけですけれども、大学以外にも近隣の小学校・中学校の校内を協力して調べて、小・中学校の校内にどういうものがあるかまで広げていくと、非常に進展があるし、利用するみんなが喜んでくれるのではと思いました。

それから、3つ目の『物質科学教育』の例です。私も理科が専門ですから、日頃から持っている課題意識として、自分のやっている研究と大学の教育をどのように結びつけるのかということがあります。自分の研究成果をいかに大学の教育の中に反映させていくか・還元させていくかを常にやっぱり考えていく必要があると思いました。そういった点では、ただ単に基礎研究をやるだけではなくて、その基礎研究の成果をいかに教育の中に反映させていくのかという取り組みだと思いました。その点では非常に評価できると思いました。

内容としては、教員養成大学の教科の理科というよりも、むしろもっと一般的な教養

教育の何か科学的な物の見方とか、そういったところにも少し研究の重点があるのではと思いました。ここには新課程がありましたね。ですから、教員養成大学ではありますが、学校教育だけではなくて、もうちょっと広い科学教育の視点で研究していくことも、一つの使命かと思いました。そういう点では、重要な研究と思います。

【委員長】

ありがとうございます。それでは、研究発表3に入らせていただきます。

研究発表3への評価

【C委員】

研究発表3は、3-1と3-2の二つのプロジェクトがあります。この二つのプロジェクトの共通ワードは、「ESD」で持続可能な開発のための教育ということです。先ほどの質疑応答で、この二つのプロジェクトの関連についてお尋ねしたところ、研究と実践の交流はされているが、それぞれが独自に取り組まれていることがわかりました。

ユネスコがESDを提唱して以来、ESDの必要性があちこちで言われ、学習指導要領にも挙がってきていますが、ESDの中身がなかなかわかりにくい状況があります。このような先端的な課題を研究と実践において、それぞれの関心にしながら取り組まれているのが素晴らしいと思います。

研究発表3-1「世界遺産教育の理論的・実証的研究」では、ESDの理念を明らかにしようとする一方で、地元の奈良を軸にしてネットワークを作られ、諸外国にも発信するという精力的な取り組みが行われています。そして外に向けてだけではなく、副読本『奈良だ いすき世界遺産学習』を教育委員会と協力して編集され、奈良の地の利と歴史性を生かした教材開発をされていることが、評価できると思います。

研究発表3-2は、附属中学校の「ESDの理念にもとづく学校づくり」です。今日の報告を聞いて、実に多面的な活動をされていることに感服しました。附属学校でこれだけのさまざまな行事等を行おうとすれば、大変なことだろうなと思いました。それと、ESDの理念を各教科に取り込んで、教科学習においてもこの理念を生かそうとされていて、共感的理解から構造的理解にいたる道筋を探求されようとする点が評価されます。

先端的な研究と実践が大学と附属で行われていますので、今後、それぞれの独自性を生かしながら協力関係をより強められれば、大学と附属学校の協同研究の素晴らしいお手本

になるのではないかと、期待をもちました。研究発表3については以上です。

【委員長】

次に研究発表4について、担当委員をお願いします。

研究発表4への評価

【D委員】

それでは、研究発表4についてお話をさせていただきます。

特別支援教育研究センターが設置されて3年間で、多彩な教師向けの研修会あるいは保護者向けの企画等をやっていたことは、高く評価したいと思います。また、センターのホームページも内容が充実しています。

先ほどの発表会の質疑応答でも述べましたように、特別支援教育支援員の研修については、全国の特別支援教育関連センターではほとんど実施されていませんし、また、市町村教育委員会でも充分できておりません。更に特別支援教育支援員自体が学校の教員経験が無い方がかなり多いことで、そういう知識が不十分な方々に対してのサポート体制を取っておられることは大変好ましいことと思っています。

それから、ペアレント・トレーニングとかティーチャー・トレーニングもあまり他ではやっていません。ソーシャル・スキル・トレーニングは京都教育大学の特別支援教育臨床実践センターも含めて他大学でもやっていますが、このような取り組みを評価したいと思います。

今後の課題ですが、高校生への支援がまだ今回の報告では無かったようですが、実は発達障害のある高校生も結構在籍しております。そういう生徒たちがいじめを受けて不登校になったりします。高等学校は義務教育でなく、試験を受けて合格して来たからそんな子はいないという思い込みを進学校の先生の方はお持ちです。しかし、実はアスペルガーなどの発達障害のお子さんも進学校のトップクラスでも学んでいるので、支援が必要となってくると思います。

それから、先ほども申し上げましたように、奈良県の中で奈良教育大学のある奈良市が一番北部にありまして、南部のほうの小規模へき地校では、なかなか特別支援学校も近くにないし、支援の体制が困難です。田原本に県の教育研究所があって、そこで研修をおおむねやっておられますけれども、南部からそこへ行くのも長時間かかります。このため、

例えばテレビ会議システムを使って遠隔授業を行うような工夫も、大学としての地域貢献ということで可能ではないかと思っております。そういう意味で、今後の活躍に大いに期待をしたいと思えます。

あと、特別支援教育専攻科と大学院の現職教員の方が、また大学院で学びつつ、あるいは専攻科で学びつつ、現場へ戻っていきながらそういう橋渡しの役を今後担っていかれると思えます。そういう点のネットワークづくりも期待したいと思えます。以上です。

【委員長】

ありがとうございました。それでは、続きまして、研究発表5について担当委員からよろしく申し上げます。

研究発表5への評価

【E委員】

研究発表5の研究プロジェクトについてです。この研究では、まだ第1期生が修士1回生ですが、M1の時に既にこれだけのものをつくり上げて出すことはなかなかできないことです。この点については、本当に高く評価するべきと思っております。

今日もらった研究紀要を見ると、セカンドオーサーは教職大学院以外の現場の先生も書いてますので、これから外にどんなふうこれを開いていくのが、一つ大きな課題になってくるかと考えています。

2点目は、教職大学院ですので、やっぱり実習がかなり重視されます。理論研究をして、実習に行って、リフレクションして論文としてきちっとまとめていくというタイプの研究成果がこれから増えてくるのが、教職大学院の味を出していくことにつながるかと考えています。

2点目の図書館の院生の研究環境支援に関してコメントいたします。「本を揃えました」だけではなくて、例えば、この研究紀要が収録されたり、連携校の研究成果のようなものがここに備わっていたりすることが大切で、まずは県内の研究成果物を収集していくことが良いと思えます。特に、ストレートの院生が勉強する時の教材になるような、既存の図書館には無い機能をこの教職大学院の図書室に加えていただければ、より充実するのではないかと考えています。

講演の内容についても、実習にかかわる部分なので、非常にいい講師をお招きになって、

いい研究をされていると考えています。以上でございます。

【委員長】

ありがとうございます。では、最後に研究発表6について、担当委員をお願いします。

研究発表6への評価

【F委員】

私は6番目の研究発表について述べます。この研究は、今、教育学部あるいは教員養成大学が直面している大きな課題に真正面から取り組もうとしていると思います。免許法が改定をされて、入り口と出口の新しい科目が設定されました。これは、単に2つの科目が設定されたことだけではなくて、その2つの間をどうするのかということが問われていくかと思っています。

その間の問題、つまり教職科目がありますが、そのつながり、背景性、これをどう考えるか。実習とのつながりをどう考えるか。それから、教科教育と教科専門、このつながりとさらに全体の中での位置づけをどのように考えるかという大きな課題です。そういう課題、特に前の2つに焦点を当てて取り組もうとされていて、きわめて意義深い研究だと思っております。

その中で、さまざまな創意ある研究をされていますが、まずは入り口の問題ですね。これについては、「現代教師論」という科目を設定して対応されています。その時に、先ほど質問もしましたが、「卓越した教師力」という設定が少しわかりにくいところがあると思います。

「cuffet」というカリキュラム全体のフレームワークが設定されています。その英語を見ますと、「curriculum framework for expert teachers」となっています。エキスパートの部分を「卓越した」と設定されています。これは、要するに、自立した専門家としての教師ということではないかと私は思っています。そうすると、日本語で「卓越した」と使っていると、その専門家といえますか、学校の中で自立して教育課題に取り組んでいける教師という意味合いが非常に変わってくるのかと思いましたので、「卓越」という言葉は適切だろうか？と質問いたしました。

それから、それぞれの先生方からリストを書いてもらって文献を100冊選定し学生に読んでもらう、との説明がありました。その100冊を選んでいく時の基準が、定めにくく

なってしまうのではないかと思いました。

ここで5つ課題が設定されてますが、特に2年生に教育実習プログラムが設定されていないことで、他の大学は2年生にどこの大学も大体設定をしているので、奈良教育大学でも意義のある実習を2年生に設定しようということです。そこで、どういう実習にするのかで、いろいろ工夫をされています。

それと、5番目に教師力サポートオフィスの設置の説明がありました。ここで言う「卓越した教師」に向けて学生が学習を進めていく時に、いろんな課題にぶつかっていく、自分で思うように学習が進まないこともあるかと思えます。その時に、きちんと一人一人の学生に支援をしていくためのシステムを作ろうとされている。これは、とても重要な課題ではないかと私は思います。

入り口から出口まできちんと学生たちに学習を進めさせていくためには、その途中で学生たちをサポートしていく体制を作る必要があると思えます。日本の教員養成では、カリキュラムの中での養成ということが基本的な考え方です。授業を受けて、あるいは実習に行ったら単位をとれば勉強が終わるということでした。それだけでいいのかという問題があります。そうすると、極めて実践的な、例えばコミュニケーション能力の育成だとか、ソーシャルスキルの育成だとかの非常に具体的な指導がカリキュラムの中ではなかなかできにくくなります。しかし、そういうものが極めて重要になっている状況があるわけです。そうすると、カリキュラムでは極めて基本的なことをきちんと学ばせて、それ以外の部分に関しては学生たちが主体性を持って、意欲のある学生がそういう課題を自分で追求していく、学んでいく。そういう学習の場を設定していくことも必要になってきます。何でもかんでもカリキュラムの中でやるのではない。そういう課題があるかと思えます。その中で、この教師力サポートオフィスは、学生の主体性、積極的な姿勢みたいなのところに狙いを置いて活動しようとしていますので、これは非常に意義深いものだと思います。

一方では、それをだれがやっていくのか、だれが指導していくのかという、とても難しい問題も出てくるかと思えます。その辺をもっと、この研究の中で検討していただいたら、一つのモデルをこれからの教員養成に示していくこととなるのではないかと思いました。

そういう意味で、非常に前向きな、新しい課題に取り組もうとされていると言えらると思えます。

【委員長】

ありがとうございました。ここまで、研究発表 1 から 6 までコメントをいただきました。まだ少し時間ありますので、追加や補足の発言はございませんか。

自分の担当ではなかったが、発表を聞いてぜひコメントしておきたいという、担当以外の発表にかかわってのご意見やコメントはありませんか。D 委員、どうぞ。

【D 委員】

研究発表の 2 に関してですが、今、理数教育のシステムの充実が問われています。京都府内で小学校教員養成課程を持っている私立大学は短大を入れて確か 8 大学だったと……。要するにサバイバルといいですか、大阪以上に……。国立大学でやっぱり勝負できるのは、理数系に強い小学校教員養成。特に今、小学校においては実験・観察が重視されている。今回のご報告は、多分、中学校・高等学校の教員になる理系の先生の養成の充実ということでの発表でした。この成果は、さらに小学校教員養成にあたりましても発展させて行っていただきたいと思います。私学に比べて国立大学が勝負できるところはそこにあるわけです。

それから、国立大学は学生に対しての教員数もはるかに多いんですね。私学の場合、理科の担当の先生はお一人しかいなくても、課程認定が来ています。それに比べたら国立大学は十数名近くの教員がいますので、この人員を活用しての実験・観察を生かした小学校教員養成のプロジェクトで、さらに発展していただければという願いがあります。

【委員長】

せっかくの機会で、こういう時に大学交流できればいいなと思うぐらい、この学長裁量経費プロジェクトの研究テーマはいろいろな話題を呼ぶテーマだったと思います。しかし、そろそろ時間が来ていますので、外部評価委員会 1 を終わりますが、よろしいですか。

それでは、外部評価委員会 2 の方へ移ります。

以 上

7. 外部評価委員会 - 2 における評価について

16:40 ~ 16:55

出席者： 外部評価委員会委員(6名)

長友 恒人 学長

【概要】

奈良教育大学では、研究に関する外部評価の一環として、第1期中期目標期間の教育研究の状況の評価結果の確定に際して提出が必要となる『卓越した水準にある業績(S S)』(平成20、21年度)候補業績資料1件に対する評価を依頼することとした。

評価の方法としては、上記提出資料に記載する内容(氏名、タイトル、雑誌名、巻、ページ、掲載年、S Sと判断した理由：第三者による評価結果や客観的指標)の他、当該研究論文全文の写しと、この研究の背景や意義を解説した関連資料を事前に各委員に配付し、書面審査を依頼した。

3月30日(火)の外部評価委員会 - 2では、各委員から1人ずつ、この候補業績への評価をご発言いただき、教育大学の研究としての独自性や、教員養成への活用の可能性・社会的意義、第三者評価・客観的指標に関する判断等、様々な視点からの有益なコメントを得た。

今後、これらの評価を元に学長がS Sとして提出するかどうかの判断を行う予定である。

おわりに

このたび、奈良教育大学は、研究に関する外部評価を実施し、その成果を刊行することになりました。

本学では、平成16年度の法人化時に、以下の中期計画を掲げました。

- ・ 教育現場や社会での実践と応用により、研究の水準・成果を検証する。検証は自己による評価とともに、社会的効果・意義を外部評価を含めて実施する。

これを具体化すべく、本学は第1期中期目標期間の最終年度において、外部評価委員会を開催いたしました。評価の方法は、第1期期間中での主な学長裁量経費研究プロジェクトを対象として、事前の配付資料と当日の発表を基に研究の水準・成果について社会的効果・意義を評価いただきました。同時に、国立大学法人として本年6月末までに独立行政法人 大学評価・学位授与機構（以下、機構）に提出が要請されている『卓越した水準にある研究業績（SS）』の候補の論文につき、ご意見をいただく事も含めました。

今回の外部評価のあり方が構想された背景として、平成20年度において、文部科学省からの要請を受けて機構が実施した、いわば包括的な研究に関する評価がありました（「教育研究評価」）。そこで、本学が独自に実施する外部評価の方法としては、中期計画及び教育大学の使命を踏まえて計画され、実施されている学長裁量経費研究プロジェクトの水準・成果を第1期中期目標期間の終了時において検証することが適切であり、かつ必要であると判断いたしました。

外部評価委員会の委員には近畿及び東海の教育大学より推薦をいただいた6人の先生方に就任いただきました。この先生方には、事前配付の報告書や業績資料の吟味・査読から、委員会での慎重な審議に至るまでたいへんなお手数をおかけしました。そして、忌憚のない、かつ建設的なご意見を賜りました。

本学として、これらを真摯に分析・検討し、第2期中期目標期間での研究全般の改善・充実の糧とさせていただく所存です。

客観的な目で本学の研究を見渡していただき、我々が十分に考慮できていない点への御指摘や御意見を賜り、身の引き締まる思いでございます。

最後に、6人の外部評価委員の先生方には、本学のために労を執っていただいたことに感謝いたします。同時に、委員長として本外部評価を進めていただきました大阪教育大学の木下百合子先生に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

国立大学法人奈良教育大学
学 長 長 友 恒 人